INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

国際交流レター 第15号

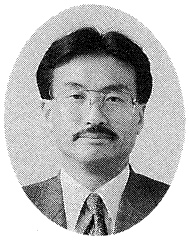
CONTENTS

国際交流プログラムの再構築に向けて…… 2
フランス・リヨン商科大学との交流始まる…… 4
リヨン商科大学との交流開始の経緯について … 5
イギリス・リバプール・ジョン・モーズ大学との交流始まる… 6
ケンブリッジ大学のカレッジ…… 7
国際経済学科海外研修の経験と今後の抱負 …… 8
交換留学生受入状況……10
第5回大田大学校学生研修団来学……14
第5回モンタナ研修サマープログラム……16
第2回大田大学校訪問学生研修団訪韓……18
第2回外国人留学生弁論大会……20
第3回甲南イリノイ研修団来学……21
交換教授姉妹校滞在印象記……22
長期交換留学生報告記……31
本学の留学生への外部からの主な案内……41
1992年度地域別外国人留学生数……42
1992年度外国人留学生の奨学金受給状況 ……42
1992年度留学生名簿……44
1992年国際交流 EVENTS ……46
海外留学者一覧……48
海外ゼミ研修一覧……48
SEMINARS ……49

'93. 3. 31 熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

国際交流プログラムの再構築に向けて

国際交流委員長　古　田　龍　助



昨年は、本学園の創立50周年と国際交流開始10周年を同時に迎えて、国際交流委員会・国際交流センターにとっては、とくに多忙な１年であった。この大変な年に委員に選ばれた先生方には、その不運を嘆くでもなく精一杯の努力をしていただき、私としては感謝の言葉もない。また、不運を嘆くどころか、多くの課題にむしろ燃え上がった国際交流センターのスタッフにも、心から感謝申し上げたい。しかしもう宴は終わった。今度は、次の10年間に向けて国際交流プログラムの再構築を考えなければならない。以下では、現行の国際交流プログラムの問題点の集約とそれに対する解決策の提案を、あくまで国際交流委員長の私案という形で述べさせていただきたい。

問題点の集約

(1)交硫センターに雑多な国際関連業務が集中し、現有人員の処理能力を超え始めた。

留学生関連の業務は、交流センターだけではなく、窓口段階では入試・学生・学務などで分担されるようになっている。だが窓口通過後は、彼らはどうしてもセンター職員を頼ってくるようになる。とくに、本来ならば学生部関連の仕事が持ち込まれるケースが多い。また国際経済学科（以下、国経と略記）の海外研修業務も、初めての試みとあって交流センター内で事務をやるよう要請があったため、思いがけず多くの仕事が交流センター職員にかぶさってきた。

(2)本学からの派遣学生に対する資金援助にかんして不公平が発生し始めた。

国経の海外研修では参加者全員が自己負担なのに、モンタナ夏期研修では選抜制とは言え、参加者１人当たり25万円（大学15万＋志文会10万）もの援助金が支払われている。さらにモンタナへの春期短期留学でも、これを利用してパワーアップした学生が、後に１年間の長期留学にもパスするという「二重取り」の事態が起こっている。

(3)留学生の宿舎にかんしても、留学生仲間の間で不公平の声が高まっている。

交換留学生については、交流協定にもとづき民間アパートや大学所有の民家を利用して、何とか宿舎を確保している。出来ればまとまった寮が欲しいと思っているところに、今度は私費留学生の間から、交換留学生の優遇を疑問視する声が強くなっている。

解決策の提案

(1)交流センターへの国際関連業務集約→集中はセンターとして基本的に歓迎→より広いスペース＋「出向」スタッフ＝集中現象の緩和

集中問題については、これは人間のごく自然な利便性感覚が引き起こすものだから、無理に組織の壁をつくって規制しても無駄だし、

分散化の方向で本当に解決しようとすれば、多額の費用がかかってしまう。そこで、集中を受け入れ、しかも交流センター専属の職員を増やさないことを前提にして、解決策を考えることにしたい。その要は、現在増設中の11号館に交流センターを移転させることである（ただし、増設部分そのものは新学部専用なので使用できないらしい）。それによって、交流センター内に専用の掲示板を設置するなどして、留学生が持ち込む雑多な勉学・生活上の相談事を、自分たちの情報交換を通じてお互いに解決できるシステムをつくり上げることができる。現状では、交流センター・留学生掲示板・留学生室がバラバラに位置しているため、情報交換のルートがまったく分断されている。

次に、国経と将来の外国語学部の海外研修との係りについては、これも交流センター内で事務処理した方が何かと連携はよくなる。ただし、交流センター専属の職員にこれ以上の負担がかかるのは困るので、それぞれの学部の予算で専従のスタッフを各１名でも「出向」させてほしい。現在でも経済学部はこの形になっているが、より広いスペースが確保できれば、海外研修専用のコーナーを設置して、見た目からも通常の交流センター業務とは一線を引けるようにできる。学生部の方でも、すでに留学生数が100名を突破していることから、１名を留学生の生活相談専従のスタッフとして、近くに引っ越す交流センターの専用コーナーに出向させていただけないか。

⑵資金援助の不公平問題→大学・志文会別援助金の性格づけを明確に→大学援助金は長期留学に特化させ、志文会援助金は学生に広く還元→短期留学は廃止＋夏期研修は援助金を大幅に減らして大幅拡充

従来の援助金制度では、大学分（500万円）と志文会分（300万円）が入り乱れており、計算するのも面倒な状況になっている。そこで不公平問題を緩和するための前提として、２つの資金源の性格づけをきちんとしたい。大学予算は発展のための「戦略的な」性格を持つものと解釈して長期留学に特化させ、志文会援助金は福利厚生的なものとして出来るだけ広く学生に還元することを提案したい。この性格づけからすると中途半端になる春期短期留学は、「二重取り」問題のほかに、当初の原則であった「相互交換主義」がキャロル大側の無関心によりすでに崩れているため、もはや存続させる意味はないと思われる。

モンタナ夏期研修の方は、志文会資金の幅広い還元のために、むしろ改革拡充したい。まず１人当たりの援助金は、25万円から５万円に大幅減額する。しかし、民間ホームステイ専門旅行業者のＩＳＡと提携すれば、旅行費用を従来の50万円から30～35万円にまで減額できる。すると学生の負担額も25～30万円となり、従来の25万円とほとんど変わらない。わずか５万円の援助であるから、事前研修や単位取得はすべて外し、学生達が気軽に参加したくなるようにする。そして夏期研修用予算を毎年200万円とし、従来は隔年20名だったのを毎年40名にまで拡充したい。この40名の枠は、各学部に定員に比例して割り振られるとよいだろう。

ＩＳＡを利用すれば、単独ホームステイということで「異文化体験」という観点からは申し分ないし、交流センターの事務処理も大

幅に省ける。ただし、ＩＳＡのプログラムはモンタナでは無理であり、また夏期よりも春期の方が費用は安くなる。そうなると研修名称から「モンタナ」や「夏期」を外す必要性がでてくる。モンタナでの研修そのものは、国経の夏期研修でむしろ大幅拡充されているので、ホームステイ研修の場所選定は学生諸君の好みと財布に任せた方がよいと思う。

(3)留学生宿舎の不公平問題

国際交流関係者の会合に出席すると、どの大学でも留学生の宿舎提供には、一番頭を痛めているのがわかる。留学生宿舎をめぐる不公平問題は、全員収容可能な寮を建設しないかぎり解決しないし、そうなると今度は、日本人学生との間に不公平が生じてしまう。実は、国際交流会館の建設に対してはすでに３億円の予算が計上されており、新図書館落成後に、（現在の教職員宿舎の跡地に建てられる）計画になっている。どの程度の収容能力を持たせるかは未定だが、問題解決への大きな一歩となることを期待したい。

フランス・リヨン商科大学との交流始まる

フランスの高等教育は、伝統的に大きく二つに分かれている。一つは大量の学生を収容する総合大学であり、もう一つは、少数精鋭のグランド・ゼコール（専門大学）である。

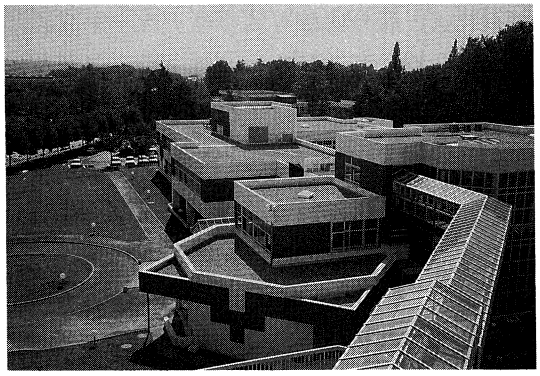
グランド・ゼコールには、教育界への登竜門である高等師範学校や理工系高級官吏を送り出す理工科学校、高級官僚の養成機関である行政学院などがあるが、リヨン商科大学もこれらの一つであり、商工業・金融各方面の高級管理職者を養成している。

リヨン商科大学はローマ時代からの二千年の歴史を有し、絹の町として世界的に知られたフランス第二の商工業都市リヨンにキャンパスを持つ。当大学は、リヨン市を中心としたローヌ・アルプス地方の産業発展の為、リヨン商工会議所が地域の協力のもとに1872年に設立した大学である。

① 交流プログラムは毎年各１名の学生交換。相互に派遣先大学での授業料・生活費が免除（留学先大学負担）され渡航費は自己負担。大学または志文会より奨学金を支給。

② 留学期間中に取得した単位は、熊本商科大学は30単位、熊本短期大学は15単位を上限として認定可能。

③ リヨン商科大学からの留学生は日本語・日本事情の他、日本社会・産業・企業について学習。



リヨン商科大学

リヨン商科大学との交流開始の経緯について

国際交流委員長　古　田　龍　助

学生交換の条件について話し合うために初めてリヨンを訪れて、もう1年が経とうとしている。わずか3泊の滞在だったが、この街の洗練された美しさは今でも忘れられない。観光資源の面ではパリと比べようもないが、米国のシアトルと同様に、そこで時間を過ごしているだけで楽しいというタイプの街のようだ。その重要な共通点としては、街並みの美しさだけではなく、美味しい地元料理があげられる。このリヨンは何を隠そう、フランス料理のメッカと呼ばれているのだ。「料理界の東大」辻料理学院も、リヨン郊外のあるお城（シャトー）を買収して分校にしているくらいだ。ついでに、あの有名なボジョレーワインの産地も、リヨンから車で約1時間の距離にある。「オイシイ」リヨンについてここまで書いてしまうと、恐らくグルメ派教員の間から「学生だけではなく教員の交換も要求する」という声が上がるような気がする。この件については学長に直接掛け合ってほしい。

さて、リヨン商科大学との学生交換の経緯だが、これは細川前熊本県知事がリヨンを訪問した時にさかのぼる。この時に細川氏の通訳をしたのが、リヨン商大で日本語を教えている米山教授だ。このリヨン商大は、実は3年制の大学院であり、フランスのビジネススクールとしては4番目にランクされるほど高く評価されている。そして、ヨーロッパ中のビジネススクールと同様に、国際化またはヨーロッパ化教育に熱心に取り組んでいる。その流れの中で、米山教授が日本プログラムの責任者として着任した。この種の国際化教育では、通常、1～2年間の準備期間の後に1年間を対象国の企業で研修生として働くことになっており、日本についてもそのためのパートナー企業を探す必要があった。そこで細川氏の来訪を期に、米山氏が熊本企業の協力を要請したというわけだ。

細川知事の指示により早速、熊本県国際課が窓口となり肥後銀行本店を研修先として、リヨン商大からの学生受け入れが開始された。ただしこの段階では、いろんな事情から3ヶ月の受け入れに留まっていた。だが、3ヶ月では語学研修の期間としてはあまりにも短い。そこでリヨン商大側は県国際課を通じて、熊本商科大学・熊本短期大学との間での、実務研修ではなく日本語習得を目的とした1年間の学生交換を強く要望してきた。こんな時、地域社会に貢献できることなら決して「ノー」と言わないのが、わが熊本学園だ。国際交流委員長に選出されたばかりの私は、岩野学長の命を受けて、吉田良夫（英語）・佐藤正年（フランス語）両先生とともに、昨年2月下旬にリヨンに飛ぶことになった。

こうして、記念すべきヨーロッパからの交換留学生第1号、セヴリーヌ・ロワイエさんが昨年5月に来学した。彼女は何と高校の時

から日本語を学び、パリ大学で数学の学士号を取得した後でリヨン商大に転入したとびきりの秀才。私の大学院クラスでも、日本語で書かれた経営戦略論のテキストをそのまま読むくらいだ。そして今年の８月には、本学国際経済学科３年の穴井君がリヨンに向けて出発する。ここで問題は、フランス語の能力と留学先が基本的に大学院レベルだということだ。私としては、穴井君が１年間をなるべく快適に過ごせるように、彼の到着までにリヨン商大側と受け入れ態勢を整えるつもりでいる。これまでの長期派遣学生の経験から類推すると、英語圏以外の国の場合どうしても単位取得は難しくなるが、少なくとも日常会話程度のフランス語は喋れるようになって帰ってくるものと期待される。

イギリス・リバプール・ジョン・モーズ大学との交流始まる

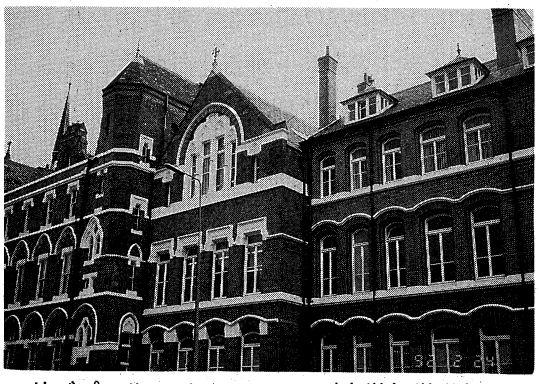
イギリス・リバプール・ジョン・モーズ大学のビジネス学部はリバプール実践専門大学における長期にわたるビジネス、マネジメントと商業簿記の教育経験からリバプール・ビジネス・スクールとして1986年に設立された。その目的は、絶えず変化する雇用主の教育要求に応えることだ。

この学校は、イギリスのビジネス・スクールの中で最も大きいものの一つで、地域経済の発展に貢献している。この目的を達成するために、産業界、商業界との良き関係を更に発展させることに重点を置いている。また、国際人を育成するため、国際化の発展にも重点を置いている。このため、リバプール・ジョン・モーズ大学ビジネス学部は海外との国際協力関係を築いてきた。そしてこの協力関係を更に進めるために海外の産業及び教育機関との繋がりに期待している。

① 交流プログラムは毎年各２名の学生交換。相互に派遣先大学での授業料は免除（留学先大学負担）され生活費は住居以外は自己負担、渡航費は自己負担。大学または志文会より奨学金を支給。

② 留学期間中に取得した単位は、熊本商科大学は30単位、熊本短期大学は15単位を上限として認定可能。

③ 必要性と希望により地元企業での企業研修を体験する。



リバプール・ジョン・モーズ大学経営学部棟

ケンブリッジ大学のカレッジ

熊本商科大学教授　坂　口　　潮

イギリスの大学には面白い点が沢山あります。Oxford 大学と Cambridge 大学を除くと、大学入試はありません（中等教育終了試験〈Aレベル試験〉を3科目パスしていればよい）。大学は3年間（スコットランド地方は4年間）。大学院も3年間。日本は4年間と5年間ですから、イギリスの方が3年も早く博士がとれます。夏休みだけで4カ月もあり、もちろん週休2日ですから、休日のほうがかなり多くなります。おまけに1年にわずか4科目くらい単位をとれば卒業できます。（従って、科目の内容は非常に専門的です。また修得単位が日本に比べて極端に少ないのは、学問とは方法・考え方を学ぶということであって知識をふやすことではないという考え方によると思われます）。だから、60分の講義が終わっても休み時間はとってありません。学位には必ず成績がつきます。「ケンブリッジ大学学士（第2級の上、科学専攻）」という具合で、これが大学院進学や就職にものを言いますので、学生は大変です。またcollege（カレッジ）制という大学の組織そのものも変わっています。そこでケンブリッジ大学を例にとり、college 制の話をしましょう。

ケンブリッジ大学というのは、31の collegeと日本の学部学科に当たるfacultyとdepartmentの集まりです。昔のcollege（最初のcollegeは1284年創立）の建物は、四角な芝生の中庭を囲んでロの字形に建てられていました。この中に学生と教員の寮、食堂、教会、講義室、図書館などすべてがあったわけです。collegeの数が増えて学生数が増加し、学問も細分化・高度化するにつれて、学部の講義や大学院の研究教育を行う建物が college から分離して作られ、大学の建物となりました。これらが faculty や department です。college は今でも、講義と試験を除く学生生活すべての場です。

1つのcollegeには、平均すると1学年約100名の学生が住んでいるにすぎません。入試は各 college が学生の将来の専攻に関係なく、独自に行いますから、彼らの専攻は全くバラバラで、文系も理系も一緒に暮らしています。講義の外に夕方、彼らは専攻に応じて1日1科目だけ、college で supervision を受けます。これは10名位の学生に教員などが1人ついて、講義でわからなかった所を教えたり、さらにテーマを与えて指導したりするもので、いわば“家庭教師”システムです（先生の方も大変です）。イギリスの高校進学率は22％しかなく、しかもその中のわずか8％が大学に進むにすぎません（日本は、96％と33％です！）。このごくごく一部の者のために、イギリスは家庭教師システムの大学教育を行っているのです。

（1991年8月～1992年8月　ケンブリッジ大学留学）

国際経済学科海外研修の経験と今後の抱負

経済学部長　岡　本　悳　也

1990年４月に国際経済学科は発足しました。その２年以上前から学科構想は検討されましたから、海外研修も第一回実施の昨年（1992年）より数年前に構想されたことになります。国際経済学科の特色を出そうという意欲の中で、当時の高瀬学部長を中心とした、私も委員の一人であった準備委員会で構想しました。すでに大規模な海外研修を実施して評判になっていた亜細亜大学の先例が参考になりました。従って、当初は必修を考えました。しかし、病気、経済的理由その他を配慮し選択必修になりました。少しでも多くの学生に海外研修の機会を提供し、刺激的で良い経験をさせたいという狙いです。

1992年７月の第一回実施の時がめぐってきて、その半年前ぐらいから具体的な準備にとりかかりました。しかし、予想したよりはるかに少ない人数しか研修に参加せず、私どもも落胆しましたし、学内各方面にもご心配、ご迷惑をかけることとなりました。第一回目ということで取り組みに甘さがあったこともありました。しかし、それだけでなくプログラムの内容、運営、実施方法にも様々な問題があるのだなということを勉強させられました。

予想を下回ったとは言え、100名をこえる学生が参加し、帰国後のアンケートにほとんどの学生が有益な経験をしたと、肯定的な評価をしていますので、様々な問題点を改善し、さらにこのプログラム全体を前進させなければならないと考えているところです。

今年が国際経済学科の完成年度ですので、今年まではプログラムの変更はできません。したがって、来年以降に向けて国際経済学科会議を中心に今後のことを検討し始めたところです。改善の方向は次のようなことになると私は考えております。

第一は、引率体制です。国際経済学科の教員は13名です。３カ国５大学に毎年引率をすることは教員の負担という点でも困難です。しかし、それ以上に研修の性格上、学生の自主性や積極性の涵養という点でもできるだけ、教職員の引率は最小限とし、学生中心の研修団として組織したいと考えております。そのために、受け入れ大学に理解と協力をお願いしているところです。また、教職員の引率にかわる学生リーダーの養成を考えております。さらに、旅程の安全、確実な計画も十分配慮したいと思います。

第二は、実施年度です。現在は３年次です。今後は２年次中心にしたいと思います。学生が意欲盛んな時、研修の成果が帰国後の学生生活に大いに活かされる時。様々な留学につなげるため、２年次中心が望ましいと考えているところです。

第三は、プログラムの内容です。現在は海外事情研修という曖昧な授業科目となっています。経済学を中心とする講義、語学学習、帰国後のレポートとやや雑炊的です。今後は海外で学ぶことに意義のある海外集中専門講

義を準備したいと考えております。それとともにそれに見合うプログラムが必要だということです。

第四は、事前研修についてです。今後プログラムが密度濃く、専門的になればなるほど事前の語学力、学力が求められます。正規のカリキュラムにこれに有効な授業科目を準備したいと考えております。さらに将来、海外研修の中に一部半年間のプログラムを用意できれば学生の能力、意欲に応じた効果的なプログラムに発展できると思います。

要は、海外研修を魅力的なカリキュラムとし、多くの学生の参加意欲を喚起し、十分成果のあがる準備をし、それに十分堪えうる学生をある程度選抜していければ理想的だと考えています。

今年度は昨年の経験に鑑み、早くから取り組み、国際経済学科教員全員が積極的に学生に働きかけました。そのかいあって人数は総数では140名程度になりそうです。内訳は昨年11名であった中国が40名近く、昨年実施できなかった韓国が10名強になりそうです。米国も90名近くにはなりそうです。中国が増えたこと、なによりも韓国研修が実施できることを喜んでいます。

今後、試行錯誤を繰り返しながら、やや荷の重いプロジェクトだという感も抱きながら、しかし何とか国際経済学科のカリキュラムの中核に育つべく努力を続けて行きたいと考えているところです。学内の皆さんの忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

1993年度外国事情研修スケジュール

日時(曜日)	米　国	韓　国	中　国
7／16(金)	商大発 福岡空港発 ホノルル着 ホノルル発 ＬＡ着 ホテル泊		
7／17(土)	ＬＡ発 ＳＬＣ着 ＳＬＣ発 モンタナ着 入寮		
7／18(日)	休日	商大発 福岡空港発 ソウル着 ソウル泊	
7／19(月)	研修開始	ソウル発 大田着	
7／20(火)		研修開始	
7／27(火)			商大発 福岡空港発 深圳着
7／28(水)			研修開始
8／11(水)	研修終了		
8／12(木)	モンタナ発 ＬＡ着 Disney Land ホテル泊		
8／13(金)	ＬＡ発 ホノルル着 ホノルル発		
8／14(土)	福岡空港着 商大着	研修終了	
8／15(日)		大田発 プサン着 プサン泊	
8／16(月)		プサン発 福岡空港着 商大着	
8／25(火)			研修終了
8／26(水)			深圳発 香港着 香港見学 ホテル泊
8／27(木)			香港発 福岡空港着 商大着

交換留学生受入状況

欧米との交流プログラム開始

英国リバプール･ジョン･モーズ大学、仏国リヨン商科大学と交流開始

本学園創立50周年を祝った昨年は、国際交流にとっても、姉妹大学交流を開始してから10年の節目にあたり、これまでの姉妹大学に加えて、英国のリバプール・ジョン・モーズ大学、そして仏国のリヨン商科大学と学生交換の協定を結んだ。この協定に基づいて５月には、リヨン商科大学から女子学生が１名（セヴリーヌ・ロワイエさん）、続いて９月にはリバプール・ジョン・モーズ大学から男子学生が２名（ティム・クラーク君とダニエル・ポズナンスキー君）来学し、現在日本人学生と共同生活をしながら、本学で学んでいる。

セヴリーヌ・ロワイエさん
リヨン商科大学３年
金融専攻
商学部商学科
ルームメイトは本学２年の
前川佳子さん・川本早苗さん

ダニエル・ポズナンスキーくん
リバプール・ジョン・モーズ大学
国際ビジネス学科３年
商学部経営学科３年次
ルームメイトは本学３年の
林　正人くん

ティム・クラークくん
リバプール・ジョン・モーズ大学
国際ビジネス学科３年
商学部経営学科３年次
ルームメイトは本学１年の
西浦和彦くん

ルームメイトへのインタビュー

留学生のルームメイトである林正人君（国経３年）、西浦和善君（国経１年）、川本早苗さん（国経２年）に毎日の生活の様子や状況等のインタビューを行った。林君はリバプール・ジョン・モーズ大学からの留学生ダニエル・ポズナンスキー君と、西浦君は同じくティム・クラーク君と、また川本さんはリヨン商科大学からの留学生セヴリーヌ・ロワイエさんとそれぞれ昨年９月より共同生活を続けている。（インタビューは、千馬有美子）

――まず、ルームメイトに応募した理由は？

西浦：何となく面白そうだったから。勿論、英語に興味があり力をつけて留学したいとも考えていました。

川本：私はセヴリーヌの前のルームメイトと知り合いで遊びに行っていたこともあり、彼女のことはよく知っていました。だから引き継ぎということで引き受けました。

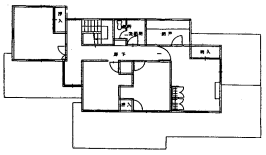
――どんな部屋に住んでいますか？

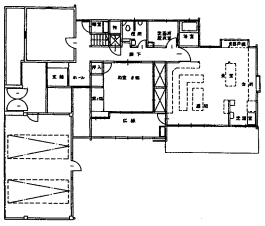
林：３人共、３ＬＤＫです。１部屋ずつ使い、残りの１部屋は共有しています。
――実際に一緒に生活を始められてどうですか。
西浦：最初の１週間は英語ばかりで頭が痛くなりました。今では日本語も少しずつ話せるようになっています。箸の使い方とか予備知識を勉強してくれていたので、別に習慣の違いで戸惑いはなかったですね。ただ、イギリスではちゃんと洗ってあるお米を売っているのでそのまま炊くみたいです。その点については教えてあげました。食事に関しては彼は何でもＯＫです。納豆でも食べてくれます。寛大で全てを受け入れる性格の人だから気楽でいいです。
川本：初めはどうしたらいいのか心配していたけど、すんなり入れました。今までの自分の生活リズムを変える必要もなかったし。掃除とか料理はどちらか気付いた方がしているって感じで、特に約束事を決めたりとかはしていません。
――いつも一緒に過ごしているのですか？
林：好きな物が似ているので、食事は一緒にすることが多いです。ティムともよく飲みに行くし、サンアントニオからのブルックも交えて合気道も習っています。接点を見つけていろいろやってます。
川本：映画をよく観てます。朝からカーテン閉めて部屋を真っ暗にして二人で観てるってことも。後は、女の子だからやっぱりおいしいお店を探して食事に行くことが多いです。私の家族と一緒にお鍋をつついたりもします。
――何か影響を受けたり、自分自身変化したなと感じることはありますか。
川本：日本語で会話しているのできちんとした日本語を使うようになりました。言葉がきれいに丁寧になったと思います。それから、セヴリーヌは勉強熱心で机に向かっていることが多く刺激されました。日本の学生と違い終末だけハメを外すようにしているみたいで、平日に遊びに行くのが不思議だったようです。
――セヴリーヌは２月下旬に帰国しますが。
川本：お姉さんのように頼っていて、生活の一部でもあったのでとても淋しくなります。この出会いでフランスが自分に近い国になったし、これからも私達の関係は続いていくでしょう。
――イギリスの２人はあと半年ありますね。
西浦：春休みには彼の家に遊びに行きます。家族や友達に会い、共通の知り合いが増えることによって益々仲が深まるだろうと楽しみにしています。
林：自分はリバプールに留学することになったので、また向こうでも会えます。いろいろ情報を得られたので良かったと思っています。
――これからルームメイトをされる方に何かアドバイスをお願いします。
西浦：あまり細かいことは気にせずにやっていけばいいと思います。
川本：私もそう思います。変に気をまわすとかえってややこしくなりますから。
林：まわりに流されない自分を持っていることです。いい、いやだをはっきり言わないとだめですね。トラブルがあっても自分を持っていれば解決できます。
――大変楽しいお話をありがとうございました。これからも更に交流を深めて、視野を広げていってください。

留学生用宿舎紹介

新交換留学生宿舎について

この度１号館南側「憩いの広場」に隣接する土地と家屋を購入する話がまとまり、平成４年４月に大学の施設として購入されました。敷地が330.57平方メートル（約100坪）、建物は木造一部鉄筋コンクリート造瓦葺二階建ての211.03平方メートル（約64坪）です。２階に４室、１階に２室とキッチン・リビングがあり、小さな庭付きの住居です。施設の利用方法については議論もあったようですが、現在本学が推進している外国人（姉妹大学の交換留学生）と日本人学生との混住方式の用に供する施設としての利用が認められました。

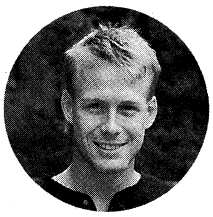




早速、平成４年９月からモンタナ州立大学からの交換留学生２名、熊本市・サンアントニオ市派遣留学生１名、本学学生１名の宿舎としての利用が始まっています。隣接地であり学食・図書館等の利用がし易いと学生諸君には好評のようです。

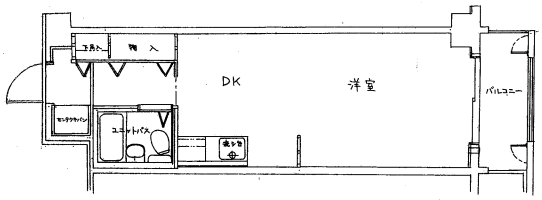
50周年記念事業建設関係のなかに国際交流会館構想がありますが、一日も早い着工が待たれるところです。

ディビッド・Ｒ・グラントくん
モンタナ州立大学４年
1992年９月～1993年８月
経済学部国際経済学科



コーリー・ロミンジャーくん
モンタナ州立大学４年
1992年９月～1993年８月
経済学部国際経済学科

深圳大学からの交換留学生宿舎について



本学の姉妹大学である中華人民共和国・深圳大学との大学間交流協定に基づき深圳大学からの交換留学生のための宿舎として1989年10月に使用を開始した。同年１月に受入れた第１回交換留学生が入居していた宿舎は施設設備が不十分であったため、同年10月に第２回交換留学生を受入れた時点より新たに民間

の宿舎を借り上げ方式で契約し、今日まで深圳大学からの交換留学生の留学生活の拠点として使用されている。

宿舎は大学の東門から徒歩5～6分の所にある。鉄筋コンクリート5階建てのワンルームマンションで最上階の2部屋（502号室、503号室）である。宿舎から東に阿蘇山、西に熊本城を眺望できる。又、宿舎の1階には郵便局があり、隣にはスーパーマーケットもある。

各部屋にはエアコン、バス、トイレ、キッチンの他、本棚、衣装ダンス、電話等の設備があり、明るい居室である。

深圳大学からの交換留学生はこの宿舎で勉学に励み、時には友人達を招きパーティーを開く等交流の場としても活用している。

受入れプログラム紹介

熊本商科大学講師　カーク・マスデン

本学が欧米文化圏から複数の長期留学生を受入れたのは1991年が最初でした。その年来学した学生は、指導教授からの個人指導と日本語クラス（妻の小貫眞理子担当）を受けるのみでした。指導教授からのアドバイスも日本語の授業も好評でしたが、日本の文化や社会に関する授業を英語で受けることが出来なかったのは残念だと何人かに言われました。そこで、1992年度の外書講読Ⅰ（国際経済学科2年次対象）を欧米文化圏からの留学生も履修できるようにしたいと思いました。

欧米文化圏からの留学生の多くは秋に来学しますので、外書講読Ⅰを後期集中にし、92年の9月に始めました。正式メンバーとして17名の国際経済学科2年生の他、モンタナから2名、サンアントニオから2名、イギリスから2名、中国から1名が加わり、合計24名となりました。その他フランスや中国から英語の達者な留学生が聴講生として参加し、活気に溢れた、実に国際色豊かなゼミになりました。

テキストとしてカール・ヴァン・ウォルフレンの『日本／権力構造の謎』を選びました。留学生は原本の英語版を読み、日本人の多くが日本語版を読みました。授業は学生同志のテキストに関する討論が中心になりました。言葉の壁は全くなかった訳ではありませんでしたが、少人数のグループで留学生も日本人学生も熱心に議論してくれました。互いに刺激し合って、意義ある授業になったと思います。また、受講者が積極的にコンパを計画したりなどして、課外での交流も盛んでした。

うまくいかなければ1回限りの試みにしようと考えていましたが、私の予想以上に楽しい授業となりましたので、1993年の前期集中ゼミ（外書講読Ⅱ）としてほぼ同メンバーで続けることにしました。学生の希望により『甘えの構造』と『「NO」と言える日本』、『「マンガ」日本経済入門』の3冊（それぞれ英語訳有り）を読むことにしました。

今年の前期が終了し、ゼミが解散すればさびしいと思いますが、その分私にとって秋から新しいメンバーで再出発することが楽しみになると思います。

第５回大田大学校学生研修団来学

第５回となる今年の研修団から、前回での夏期研修の時期を変更し２月にお迎えすることになった。今回は金炳民貿易学科副教授を団長とする引率教職員４名と学生33名の皆様が来熊した。学生の皆さんはほとんどが初めての来日だが、前年９月に本学からの第１回大田大学校訪問学生研修団で訪韓した学生との再会を含め、ホームステイの皆様の温かい持てなしにすっかり感激した様子だった。３泊４日の短期日程とはいえ、別れ際には涙する光景も見られた。

学生研修団の皆さんには日本文化・事情理解の一助として例年ホームステイを体験していただいています。今回も本学学生を中心に大学・高校の教職員の皆さんにご協力を頂きました。この欄を借りて厚く御礼申し上げます。

第５回　大田大学校学生研修団滞在日程表

月／日(曜)	行　　程	宿　　泊
2／6(木)	訪日（韓国・ソウル→日本・福岡） 来学→歓迎夕食会	本学高遊原研修所
2／7(金)	キャンパス見学→熊本放送見学→ 市内観光→ショッピング	ホームステイ
2／8(土)	テクノポリスセンター見学→ 阿蘇観光	本学高遊原研修所
2／9(日)	離日（日本・福岡→韓国・ソウル）	――――

本学のインターナショナルハウスへもホームステイ
鍋のお味は如何？

阿蘇火口にての記念スナップ

私のホストファミリー体験

平成4年3月経済学科卒業　久山　康子

私の家には大田の学生を2人受け入れ、友達と計3人を泊めることになっていましたが、急遽1人増えて3人受け入れることになりました。

夕方、大学へ迎えに行って、街を案内しましたが、皆疲れている様子だったので早めに切り上げて家へ帰り食事をすることにしました。その食事で何をするか母といろいろ考え、私が食べ物の好き嫌いが多いせいかかなり頭を悩ませ、結局、日本の代表的な食べ物であるお寿司と食べたいものだけ食べられて嫌いなものは食べなくてすむ鋤焼とにしました。これらは、韓国の方にも抵抗なくかなり好評だったようです。

話す時の言葉は、お互いの言葉は解らないのでほとんど英語で、難しい言葉になると日韓辞典を引っぱり出したりして何とか意思の疎通は出来ていた様に思います。英語は世界の共通語だと、英語圏ではない韓国へ行った時と同様にこの時もつくづく感じました。でも、初対面の人とすぐに親しくなることはなかなか難しいですが、お互いに一種のつながりが初めからあるのですぐに打ち解けることができ、言葉より先ず心だとも感じました。

自宅にて（筆者は右から2人目）

ただ1つ気を付けた事は名前です。韓国の方の名前は、私達日本人には中々馴染めない上に、3人も受け入れることになったので、名前だけは間違えずに呼ぼうと気を使いました。

それから、食事をしながらワイワイ話をしている所へ父が挨拶に入って来たところ、3人申し合わせたようにピタッと話をやめ、お箸を置き、立ち上がってシャキッと挨拶をされました。その場にいた私達（母、友達）は驚きと共に感心しました。

私がこのホストファミリーに応募したきっかけは、自分が大田大学へ研修に行ったときの思い出にあります。私が大田大学へ研修へ行った時、観光地では日本人イコールお金という感じで私達を見るたびに「千円」という声が聞こえ、少々うんざりしていました。そういう事ばかりが続いていたせいか、大田大学へ行った時ホストファミリーの人々や学生の優しくて暖かい心遣いがとても嬉しく、自分も是非ホストファミリーをという思いにさせられました。

今までは、ただ外国の人と話をしたい、友達になりたいという気持ちはあってもその方法、きっかけがないし、家も熊本市内でなかったので無理だろうと思い込んでいました。ところが今回は、家が遠くても長期間ではないので今まで外国の研修生を受け入れることの障害がすべて取り除かれたのです。ただ残念なのは、1年生の頃からもっと積極的に参加していればもっと沢山の人達と友達になれただろうという思いと、たった1泊（夜～朝）とあまりにも短すぎ、せめて1日くらいほしかったということでした。

私は、国際交流という大袈裟な事ではなく、ただ外国の人と友達になりたいという思いで引き受けたのです。私と同じような思いをもっている方は、このホストファミリーは絶好のチャンスだし、それに海の向こうに友達がいると思うと世界が広がったような感じがします。

第５回モンタナ研修サマープログラム

第５回モンタナ研修サマープログラム

熊本商科大学助教授　堀　　正広

７月29日午前11時、学生18名と引率３名の21名は、待ち受ける出会いと感動に、はやる気持ちを抑えながら商大前を出発した。

モンタナでは午前中は英会話、午後からフィールドワークと各自のリサーチ。学生達は毎日の過密な日程を若さと好奇心で積極的にこなしていった。見学に出かけた縫製工場、植物センター、野生博物館、テレビ局、廃墟の金鉱の町、託児所等では、学生達は次から次と質問をする。コーディネータの Tracy は、いつも案内人に学生達のことを質問魔として紹介していた。リサーチでは各自のテーマに沿って調査を進める。伊藤君は子供を見かけるとすぐに飛んでいき、子供の関心や夢そして、日常生活について質問する。山本さんはサマースクールで学外から来ている人々に、大学の食堂で話しかけ、アメリカ人の結婚観を探る。リサーチをしながら、自分の結婚観の偏狭さに気付く。岡君はアメリカンフットボールのチームの練習に参加し、取材する。このように各自が工夫しながらリサーチを進めていた。

二泊のホームステイは学生達には最も感動的だったようだ。なかには、ホストファミリーとの別れを惜しんで涙する者もいた。バーベキューパーティーではカントリミュージックの生演奏によって、乗馬の練習場はダンスホールに変身。引率者も奇妙な踊りを披露して拍手喝采を浴びる。Thank-you party では、学生自身が作った日本料理と出し物でお世話になった方々に感謝の意を表した。

川下りに挑戦

こうして、モンタナでの３週間を終えた８月17日午前６時のミズーラ空港は、涙、涙の別れだった。学生達は日本人以外の人々との別離で、これまでこんな涙を流したことがあっただろうか。

若い時に異文化を体験することは、人間形成という点から考えると、間違いなく生涯における重要なエポックと成り得る。その点では、今回のサマープログラムは有意義で、大成功であったと思われる。しかし、サマープログラムの目的である、交流と異文化体験そして、それらを通しての教育の面から検討すると、まだ改善の余地があるように思われる。２年後のサマープログラムに期待したい。

「モノ」から「ヒト」への国際化を

モンタナ研修団団員リーダー
経済学科４年　野田　　光

渡米する前は正直言って喜びが先に立ち、こんな気持ちでこの夏を過ごしていけるのだろうかと不安だった。しかし、そんな不安もＬＡの大地に第一歩を踏み出したら一瞬で吹き飛んでしまった。今思えば、これからの生活への希望と、アメリカの自由な空気がそうさせたのかもしれない。そして、その興奮が冷めないまま深夜のモンタナへ到着。明日への期待と不安が入り乱れ、そのまま眠りへ落ちていった。

ＭＳＵでは午前中に英会話、午後は大学の施設見学や乗馬、市内観光など、かなりハードであった。ホームステイでは、メンバーがそれぞれの家庭に招かれ、アメリカの生活を体験した。印象深かったのは彼らの社交的で、明るい性格である。最後の１週間はカリフォルニアで過ごしたのだが、アメリカ人も様々だ。モンタナの人々は地域性を大切にしながらも異国の人さえ本当に快く歓迎してくれた。

日本人にはこの寛大さ、色々な考え方や習慣、文化をも享受する国際的観点が必要ではないだろうか。何故なら、他人を受け入れなければ、自らの主張を受け入れてもらえないからだ。モノの国際化は進展した。最近の日米関係から見ても、今こそヒトの国際化を早急に図るべきではないか。そう考えつつ、僕はアメリカの暑い夏を振り返っていた。

研　修　日　程　表

期　日	行　動　内　容	宿泊先
７／29水	大学　⇨　福岡　⇨　成田　⇨　ボーズマン	ＭＳＵ寮宿泊
７／30木	オリエンテーション、キャンパス・ツアー	
７／31金	ＭＳＵでの研修（英会話）	
８／１土	川下り・乗馬等レクリエーション	
２日	休　息	
８／３月～８／７金：ＭＳＵでの研修（英会話・特別講義）		
８／８土	イエローストーン国立公園見学	山小屋
８／９日	同　上	ＭＳＵ寮宿泊
８／10月～８／14金：ＭＳＵでの研修（英会話・特別講義）		ホームステイ
８／15土	グレーシャー国立公園へ	山小屋
８／16日	グレーシャー国立公園見学（ミズーラへ移動）	モーテル
８／17月	ミズーラ　⇨　ロサンゼルス ロサンゼルスでの研修及び観光（３泊）	ホテル泊
８／20木	ロサンゼルス　⇨　サンフランシスコ サンフランシスコでの研修及び観光（３泊）	
８／23日	サンフランシスコ　⇨　成田	
	（日付変更線通過）	
８／24月	成田　⇨　福岡　⇨　大学	

第２回大田大学校訪問学生研修団訪韓

韓国研修旅行を終えて

熊本商科大学助教授　勝部　伸夫

まだ残暑が残る９月、引率３名、学生22名で編成された第２回目の韓国訪問研修団は、日本から最も「近い国」韓国へと旅立った。５泊６日のコースは、釜山を振り出しに新羅の栄華を今も残す慶州、大田大学校のある100万都市・大田直轄市、静かなたたずまいを見せる百済の古都・扶余、そして人口の半分近くが集中する首都ソウルと、駆け足ではあるがまさに韓国を南から北へと縦断する中身の濃い旅であった。

にわか仕込みの勉強ではあったかも知れないが前もって韓国について学び、そして実際に訪問することで得られた成果は学生諸君にとって決して少なくなかったようである。例えば、現在しか見ず歴史に疎くなっているわれわれ日本人にとって、独立記念館での一時は、安易に水に流してはいけない歴史の重い断面を垣間みて深く考えさせられる契機となった。また一方、ホーム・ステイを始めとする大田滞在中のスケジュールにずっと付き合ってお世話してくれた大田大の学生の皆さんとの交流は、私たちの中に心暖まる思い出を沢山残してくれた。

この研修旅行を通じて今後更なる交流の輪が広がっていくことを期待するとともに、今回お世話いただいた大田大の関係者の皆さんに感謝したい。

扶餘（プヨ）博物館前にて

第２回　大田大学校訪問学生研修団日程表

期　日	行　　程	宿　　泊
９／２（水）	12：00　本学出発、14：30　博多港出発〔大学バス〕 17：00　博多港出発〔フェリー〕	船　上　泊
９／３（木）	9：00　釜山港着、10：30　釜山港発〔バス〕 11：30　慶州到着、昼食・慶州仏国寺等の見学	現代ホテル泊
９／４（金）	午　前　慶州見学・昼食・慶州出発〔バス〕 15：00　大田大学校到着 歓迎式典 ┌学校紹介（スライド上映） └ホストファミリー学生紹介	ホームステイ
９／５（土）	午　前　大田ＥＸＰＯ弘報館・科学館　昼食 午　後　独立記念館参観 金麟濟先生・金寛洙先生・国際交流室主催夕食会	大田中央観光 ホ テ ル 泊
９／６（日）	抹余・公州〔武寧王陵〕見学　〔大学バス〕 理事長・総長主催夕食会	大田中央観光 ホ テ ル 泊
９／７（月）	午　前　大田出発、　民俗村見学 午　後　ソウル見学〔バス〕	ソ　ウ　ル ラマダオリンピアホテル泊
９／８（火）	午　前　ソウル　国立中央博物館参観 午　後　南大門市場見学　〔バス〕 18：15　KE734 ソウル発　10：30　大学着〔大学バス〕	

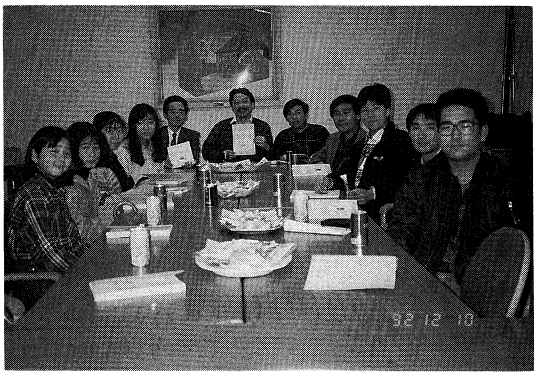
韓国研修を終えて

経済学科２年　山本さゆり

今回の研修は慶州、大田、ソウルでこの１週間という短期間にしては内容は非常に濃いものであった。この中で特に大田には３泊し、この研修中でのメインである。私も実際にここでの印象が特に残っている。大田は韓国で言うと忠清南道に位置し、「文化、教育」の都市である。それ故に私も興味深く、また、大田大学生との交流やホームステイには多く関心を持っていた。

大田に着くと学校の玄関に“歓迎”の文字が見え彼らは私達を快く迎えてくれ、次第に私も慣れていき交流会では身振り、手振り、また筆談をした。やはり同世代、話す言葉は違っても私達と本質的には全くかわりはなかった。この大学は1980年創立の私立学校で、まだ工事中の所もあり新しくてきれいだった。教養、法経、科学、工、漢方等の５学部と大学院、付属病院を擁する総合大学で学生数も約4,000人で活気があふれていた。静かなたたずまいのキャンパスの中で学生は勤勉で私のホームステイのパートナーの話でも驚くことばかりだった。彼らは夜は図書館で勉強し、日曜ともなると市内の図書館はいっぱいで席を取るため朝早くから列が出来るそうである。食事も弁当を昼、夕の２食を持参で行く。私はこの話を聞いて目が覚める思いがした。韓国は今、「先進国」への正念場を迎えている時期である。その中でこれからの経済、政治などを発展の道へ導く私達の世代が、いわば目の色を変えている。私はここで強いパワーを感じた。韓国はエネルギッシュな国である。大田の市街でも熊本のような町並みで、ほとんど日本と変わらない。交通面での充実の方はまだまだだが、きっとあと10、20年すると日本は追いつかれるのではないかとそんな気がする。

私自身この研修の当初の目的は単純なことであるがとにかく日本から他国を見るのではなく、他国から日本を「知る」ことだった。現在の固定の観念を捨て肌で感じて来ることが目的だった。そのため韓国の地理、歴史の勉強会であった事前研修合宿は大変「韓国」を「知る」ためプラスになった。特に食事のマナーは、日本と異なることが多くホームステイ先で大変助かった。同じ米食文化とはいえスプーンで御飯、汁物もスプーン、箸は、おかずをつまむときのみに利用する。その際、決してその器を持ち上げないことや裏箸の習慣もない。「礼節の国」と言われるようにホームステイ先の家族は私を快く迎えてくれてここでも日本文化との相違を発見でき新鮮だった。



自作の帰国報告書を手に喜ぶ団員達

第２回外国人留学生弁論大会

熊本商科大学講師　**カーク・マスデン**

本学の外国人留学生による日本語弁論大会は、国際交流委員会が主催していますので、通常、委員長が大会で挨拶をし、審査委員長として審議を進め、そして受賞者を表彰します。しかし、今回は古田委員長が海外に出張中でしたので、私がその代理を務めました。弁論を聞きにいらした多くの方にとって、外国人である私が「審査委員長」になっていたことは大変意外なことだったろうと思います。実は、私自身も指名を受けて大変驚き、戸惑いました。日本語に関しては、私はまだ「勉強中」ですので、とても「審査委員長」という大役を務められるはずがありません。

しかし、それは私個人の問題であって、日本語が真に国際語となっていれば、外国人でも日本語弁論大会の審査委員になりうるという古田委員長の考えには大賛成です。実は10年程前にＮＨＫ主催の日本語弁論大会を見てその審査委員の評価の仕方に問題があると感じましたので、著明な外国人も審査委員会に含めることを提案したことがあります。ＮＨＫ側は「ええ？」という感じで、私の提案は大変意外だったようですし、その趣旨も理解されなかったようです。この意味でも本学の大会は規模は小さくても、全国的な大会の手本になる面を持っていると思います。

審査結果

〔最優秀賞〕

熊本商科大学大学院商学研究科１年　中国

張　　英　「日本の国際化について私が思うこと」

〔優秀賞〕

熊本商科大学商学部経営学科研究留学生　中国

陳　　正　「ジャパン・急いでどこへ行きますか」

熊本商科大学経済学部経済学科研究留学生　中国

羅　智　偉　「金丸事件に思うこと」

〔特別賞〕

熊本商科大学商学部商学科・リヨン商科大学交換留学生　フランス

セヴリーヌ・ロワイエ　「フランス人留学生が見た日本」

熊本商科大学商学部経営学科・深圳大学交換留学生　中国

範　漫　真　「私が感じた日本の国際化」

第3回甲南イリノイ研修団来学

甲南イリノイプログラムで1年間神戸市の甲南大学に留学中の学生研修団が、日本留学最後の研修であるフィールドトリップとして、1990年より毎月4月下旬に3泊4日の日程で本学を訪問、交流を深めている。今回も4月21日～24日まで25名の米国大学生が熊本に滞在し、本学学生、教職員の家庭でホームステイを体験した。ホストファミリーの皆様には大変お世話になりました。

ホストファミリーの感想

国際経済学科2年　矢澤　雪絵

昨年の五月、私はホストファミリーをすることになりました。それは、従姉妹がやるのでおもしろいから私もやってみたらといういわば道づれホストファミリーでした。今まで1度もそんな経験がなく英語もあまり得意でない私に、外国人をみると顔がひきつる母、興味津々だけど私の影にかくれてしまう妹弟とこの上なく頼りないメンバーに最初のうち母は反対しました。しかし、今、単身赴任している父が、会社での英会話の先生に影響をうけたらしく、3日間という短い期間でもあったので、我が家でひきうけることになりました。一旦ひきうけるとなると一番消極的だった母が「まだか、まだか」とまだ誰がくるのか決まってもいないのに、おちつきのなくなる始末。「そんなに緊張しなくていいって。家の子と同じでいいんだよ。」と、大学でもらった“ホストファミリーをするにあたって”のパンフレットを家族中に見せ、準備は万端、もういつでもきて下さいという気持ちにだんだんなってきて、その盛り上がりは最高点に達していました。そして、待っていた留学生達がやってきて、そのホストファミリーとも初めて会ったわけですが、うれしさと共通の話題があるためか、知らなくても、すぐに仲よくなり、その調子で留学生とも気軽に話すことができました。驚いたことに、留学生は日本語がペラペラでおかげで当初我が家で心配したことは無駄になり、3日間は楽しいままアッという間に過ぎていきました。ほとんどが市内観光に費やされたため、特に父は話し足りなさそうで、母も3日間しかないのと寂しがり、私も短いなぁというのが実感でした。初めてホストファミリーをしたわけですが、やってみると意外と楽しいし、友達も増えるし、今思い出してもいいことばかりでした。是非興味のある人は私のように何となくでもいいですから、国際交流センターに足を運んで話しだけでも聞いてみては。きっと世界はなんて狭いんだろうと思いますよ。

（筆者は左から3人目）

交換教授姉妹校滞在印象記

熊本商科大学印象記

大田大学校教授　鄭　鳳　輝

国際的名門校として雄飛しつつある姉妹校熊本商大に、私は1991年９月から1992年２月までの１学期間交換教授として滞在しました。半年間の短い期間でしたが、私にとっては新しい経験であり、一生忘れられない楽しい追憶となっています。当局と教授、職員、それから私と一緒に勉強した学生諸君には本当にお世話になりました。心から感謝致します。熊本商大で私は色々印象的な経験を致しましたが、その中から何よりも次の５項目を挙げたいと思います。

１）立派な最新式教育施設、学究的で快適な研究室の雰囲気、大学の心臓部をなす図書館の豊富な蔵書と資料等の勉学環境が美しいキャンパスに広がり、異国からの訪問者を安心して学べるように迎えてくれました。特に校門からの銀杏並木と、清掃が行き届き整った校庭は印象的でありました。

２）講義室での教授の講義と学生の受講態度は静粛で、静かすぎて女性的な感じさえも与えたものですが、反面、物静かで学究的、集中的、能率的に映り、熱心に聴講している学生達の真剣な目差に日本の将来が期待されますし、韓国の動的、力動的、開放的、現実参画型で討論の多い講義室の雰囲気とは対称的でありました。

３）何よりも強い印象は11月の託麻祭でありました。自由闊達、師弟同行、全学一家の学風のもと、全学園の家族と外国留学生が一体となり、共同体意識、サークル協同精神、個人的能力発揮が充分に学園行事を演出し、圧巻でした。永遠に記憶される経験であります。

４）熊本商科大学を取り巻く自然環境の恵も素晴らしいものです。阿蘇の山の雄大さ、天草の海の絶景、熊本城の古い歴史の香り、静かな市内の町並みと、水前寺公園の情趣等は私の熊本生活を豊かに快適に、多様で、変化する楽しみを味わえるようにしてくれました。

５）短い期間ではありましたが、商大滞在中、韓・日、特に大田・忠清南道と肥後との歴史的関係の深さに今一度驚きを覚え、自分なりに資料収集に熱中する機会があって幸運であったと思っています。資料のために熊本市内は勿論、長崎、有田、唐津、博多、玉名、天草、八代、人吉、阿蘇、高千穂までの旅行は一生忘れることのできない経験でした。

これからも商大も総合大学として国際的な名門大学にますます発展するでしょう。姉妹校である大田大学校も一緒に手を携えて21世

本学の教え子達と共に

紀の主人公になれるように共に努力致す事を期します。

〔1992年9月～1993年2月　本学滞在〕

韓国・大田での1年

熊本商科大学助教授　勝部　伸夫

どんな人でもある場所にちょっと長く住んでみると、自然にその土地への愛着のようなものが生まれ好きになってくるに違いない。最初から土地への愛着などという大げさな言い方をするには余りにも短い期間ではあったが、交換教員としての韓国・大田（テジョン）での1年間の生活は、私にそういう感慨をもたらしてくれるものであった。

旅行で何度か訪問した時とは違って、その国の庶民の中に実際に入り込んで生活の息使いを肌で感じながら過ごしてみると、そこから初めて韓国の人々の歴史と文化に彩られた確固とした生活様式と人生観がほのかに見えてくる。買物一つとってみてもそうであった。大田にも勿論デパートはあったが、そういう場所での買物の上品さよりも、すれ違うのに肩と肩が触れ合うような狭い路地から路地へと広がる市場（シジャン）の喧騒の方が韓国らしいダイナミックさと人間味に溢れていた。売り手とのコミュニケーションの不必要なスーパーでの買物に慣れた人間にとっては、時に駆け引きが不可欠なここでの買い物には興味の尽きないものがあった。市場は元気のよいおばさん（アジュモニ）やおばあさん（ハルモニ）達のまさに独断場であり、韓国経済は彼女達が底辺で支えているのかと妙に感心したほどである。そうした市場の風景に象徴されるように、人と人とのふれ合いがまだ濃厚に残っているこの社会に私はいつしか魅了されるようになった。

大学でもそれは同様だった。日本からの交換教員の仕事は、韓国の学生達に日本語を教えることである。語学の専門家でない私のような人間が教壇に立つのだから随分つたない講義だったと思うが、大田の学生達は一生懸命聞いてくれた。そして何よりも私自身が楽しく教えることが出来たということが今も心地よい印象として残っている。また、学生達とすれ違うと彼らが人懐っこく挨拶をしてくれたことも、今の日本の大学との違いを改めて思い起こさせるものであった。

韓国は言うまでもなく日本から最も近い隣国である。一見すると区別がつかないくらい顔もよく似ているし、（知らない人には信じられないかもしれないが）言葉も驚くほどよく似通っている。だがこの1年間の滞在は、共通点もさることながら思考や行動様式の韓国的特徴を学ぶよい機会になった。お互いの違いを違いとして素直に見つめるところから理解は始まる。そうした韓国で得たものをこれからの交流に生かすことが、温かくお世話して下さった大田大の皆さんへのささやかな

竜平スキー場からの帰途（筆者は前列左端）

恩返しになるのではないかと思っている。

〔1992年3月～1993年2月　大田大学校滞在〕

雪国訪問記

深圳大学外事辨公室副主任　侯　梅　芳

著名な作家、川端康成が書いた『雪国』を読んだ人なら誰でも、その中に描かれている新潟の美しい雪景色に陶酔された筈です。その雪国をこの目で見に行くのが私の夢でしたが、1992年の2月、交換教員として熊本商科大学に滞在中、やっとこの夢が実現しました。

雪国という位ですから雪が凄く多いのが当然ですが、新潟県中央東部にある入広瀬は特に雪が多く、総面積が210万平方キロの山村は年間に5か月間雪の降る日が続き、冬には平年で3メーター位積もります。一晩雪が降り続くと、次の日にドアが開かないほど雪の中に家が埋まってしまうことはよくあることで、それを見越して家の二階にドアが付けられているのが普通です。

入広瀬は山菜がよくできます。『山村は山を頼りにする』という言葉のように、山菜を通じて都市の方々との交流を深め、組織的な保護と宣伝そして施設整備等により、山菜を産業として育てるため、入広瀬は10年前に『山菜(さんざい)共和国』の独立宣言をしました。『山菜共和国』は国旗もあり国歌もあります。私は着いた始めの日に『山菜共和国』の大統領を始め、国民の皆様に山菜宴会を催していただき、山菜料理ばかり出されたことに驚きました。宴会の終わりに『山菜ふるさと入広瀬、みどり濃き山々越後路の、ああせせらぎの里、季節で味わうぜんまいなめこ、今宵は炉端でなじみと飲もう、このふるさとは山菜共和国……』という国歌をみんなと一緒に歌ってとても愉快でした。「いまの入広瀬はもう人々に忘れられたところではなく、日本国中に知られている山村になりましたから、年間の山菜の売上額は、『共和国』成立前の7千万円から3億円に上がり、村の収入は大幅に増えました」と席上で大統領様は自ら誇らしげに言われました。

入広瀬はまた国際交流を進んでやっています。五年前に中国の楊州市湾頭鎮との姉妹村鎮を締結されました。これは中日両国に結んだ100対の姉妹城市の中で、始めての村鎮関係です。楊州市との交流は頻繁に進められています。一年前に、日本のどこにもない『洞窟ふろ』を村に造って、その隣に『日中友好飯店』という名前をつけたレストランを造りました。そして、本場の中国料理を作り出すためわざわざ楊州からコックを招請しました。レストランがオープンされてからは、中国料理を楽しみに来る人々が絶えません。

入広瀬村は1987年に『わが村は美しくコンクール』で内閣総理大臣賞を受賞されました。村長の須佐様は28年間村長をやっていて、新潟県内に名高く、『村造り』というテーマで

歓迎会にて

よくあちこちへ講演をしてまわるそうです。入広瀬に着いた次の日に、ちょうど村長様が新潟市へ講演にいくので、私は村の教育委員長の佐藤様のご案内で、幼稚園、小中学校、養老院、木工会館、山菜会館、山菜工場等を見せて頂きました。

入広瀬での4日間は短いものでしたが、日本の山村のことがよく分かりました。そして、山村と都会との差がほとんどないことも分かり、私にとってはいい勉強になりました。

〔1991年9月～1992年2月　本学滞在〕

熊本の想い出

モンタナ州立大学教授　ハロルド・シュロッツハウアー

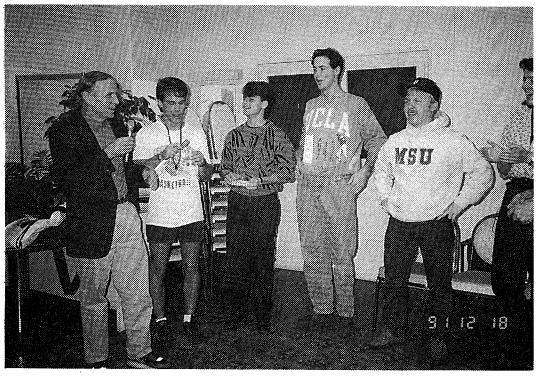
1991年9月初め、福岡空港から熊本に到着したときの私の心の中は、日本での生活への期待と不安、そして興奮とでいっぱいでした。しかし、アパートへ一歩入ってみると、食卓には籠いっぱいに、そして冷蔵庫の中にもたっぷりと食物が備えられ、家具もきちんと整えられてあって、たちまち元気が湧いてきました。部屋は大学や市街への買物にも便利なところにあって、すぐに気に入りました。

最初の数週間で、大学や水前寺近辺での買物にも慣れました。周囲の人々は、皆優しく親切で、最初に抱いていた不安は除々に消えていき、逆に温かい歓迎を受けているのを実感していった次第です。

岩野、園田両学長との和やかな歓迎パーティ、夕食会も済んで、私の画家としての仕事を再開できるようにと、アトリエを頂戴致しました。当時建設中の新教室棟の壁画製作のお話も戴きました。その絵に、深い友情を表現することができればと、私は奮起致しまして、早速、二枚続きの大きな壁板の製作に取り掛かりました。そして、1992年3月ついに完成し、熊本学園創立50周年記念式典と新教室棟の落成式に間に合いました。光栄なことに、『Intrinsic Moment Number One and Two』というタイトルを掲げて12号館に展示して戴き、大変誇りに思っております。

来日前のことですが、ボーズマンの私の家で昼食会を催しまして、熊本の芸術家の方々5名と、モンタナの美術協議会のメンバー数名をお迎え致しました。熊本からの方々は、1992年7月に開かれるアートパフォーマンスの企画の為にボーズマンに滞在されていたのでした。そこで来日しましてすぐ、彼等と連絡を取り、仲介役としてお手伝いをさせて戴くことができました。それはモンタナでは日本のグループによるものとしては初めての、しかもとても素晴らしいアートイベントになりました。

また、1993年10月には、私の日本滞在に関連したアートイベントがモンタナ州立大学芸術学部で開かれる予定です。そこでは日本全国から集めた手塗りの凧が『日本の凧展』と題して展示されます。熊本商科大学・熊本短



留学生忘年会で歌を披露する先生（左）

期大学の国際交流センターの多大な御支援のお蔭で、75種類にも及ぶ伝統的な凧を集めることができました。モンタナ各地の美術館や画廊等でも展示され、多くの人々の目に触れることになればと願っております。

凧への関心がきっかけとなって、熊本をはじめ、日本各地に友人、知人ができました。凧作りの名匠にもお会いすることができ、歴史やテクニック等についても色々と学ばせて頂き、その度にいつも温かい笑顔で私の凧収集に協力してくださいました。この日本凧の展覧会が、熊本とボーズマンとのまた一つの新たな文化の架け橋となって、友好関係がさらに強力かつ親密なものになることと信じております。

〔1991年9月～1992年8月　本学滞在〕

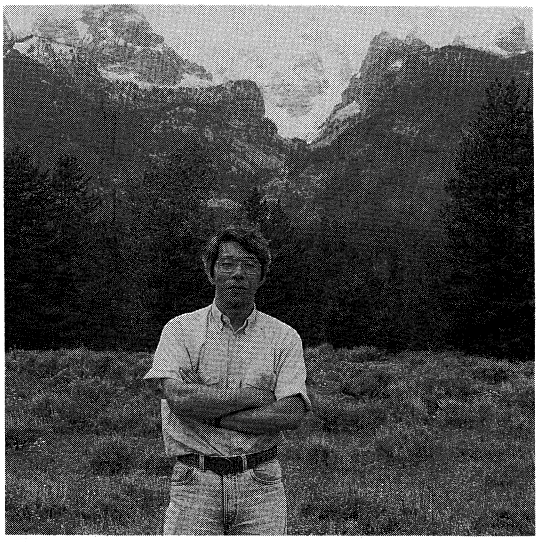
再び、ボーズマンに滞在して

熊本商科大学教授　慶田　　收

昨年1月から8月まで交換教員としてモンタナ州ボーズマン市に滞在した。6年ぶりの滞在である。この間にボーズマンの町、そして人々の日本に対する関心も随分変わった。

6年前と比較してみて、いろんな意味で日本に対する関心は、アメリカ全体で高まっている。モンタナの場合も例外でなく、熊本県と姉妹関係にあるためか、日本に対する関心は高い。前回、何らかの形で日本に関係がある、あるいは、関心をもっている人は、軍役で日本へ行ったことがある人など一部の人に限られていた。ところが、今回、そういう人ばかりでなく、日本の英会話学校で英語を教えていたとか、民間人のグループ交流を通してとか、具体的なビジネス・チャンスとして日本に関心をもっているとか、日本への関わりを持つ層が広がってきている。

このように日本に関心を持つ人の層は確実に広がってきて、その情報を得たいと思う人は多いようである。では、日本語に対する関心はどうだろうか。残念ながら、日本語を修得しようというところまでは、なかなかいかないようである。理由は調べていないので分からない、日本語が欧米の言語とは基本的に異なる言語体系であるところに理由があるのかも知れない。今回の場合、授業名が時間割に掲載されてなかったこともあり、受講した学生は9名で、前回の場合とあまり変わらなかった。異なるのは、前回、受講者が語学、社会科学系の学生に限られていたのが、今回、理工系の学生にまで広がったことである。そのうちの一人は、受講した理由として、技術の面でも日本が進んできたので、日本語を知っていることは将来自分に何かの形で役に立つのではないだろうかと言っていた。そういう意味では、数こそ変わらなかったけれど



も、日本語に関心を持つ層が広がってきたといえる。

ボーズマンの町は、大学町という側面の他にイエローストン国立公園への観光の拠点の町という側面を持つ、町はギャラティン・バレーの中にあり、町の南北と東にすぐ山がひかえ西に畑が続き、遠くにロッキーの山脈が眺望される。景色のいいところで、夏はラフティング、キャンプ、冬はスキーといったアウトドア・ライフにとって最適の場所だ。都会と違って雑踏がなく、空気が澄んでいて、住み心地がよい。このためか、町の外にでると、畑だったところに新築の家々が立ち並び始めている。州外から退職後の生活を求めて人は移り住むらしい。モンタナ州の中でもボーズマンは人気があり、不動産の平均価格は州内でもっとも高い。所得の伸びより不動産価格の上昇が速いので住宅を購入するのが困難になってきたという新聞の記事があった。ダウンタウンは相変わらず以前と同じで、一見しただけでは変化はわからない。だが、この町は6年の間に確かに変わったという印象をもった。

〔1992年1月～1992年8月　モンタナ州立大学滞在〕

熊本滞在に寄せて

モンタナ州立大学名誉教授　ロバート・フィギンズ

この場をお借りして熊本の良き友人達に感謝の意を表せますのを、大変嬉しく思っております。皆様の親切で丁寧なおもてなしに感謝し、また、熊本の社会、生活様式に敬意を表します。

文化の交流の価値というのは、個人の体験によって異なってくるものです。私の場合は、熱中すればするほど短く感じ、それは貴重な体験となりました。出来る限りのことを伝えようと努力致しましたが、それ以上に多くのものを得たように思います。私はあらゆるものを全て受け入れようと致しました。そのため、日本文化に関しては、外国的な見方や偏見を一切持たずに評価しようと心がけておりました。このようにして、授業の傍ら学ぶことができたのです。

ご承知の通り、世界、とりわけ日本は急激な変化の過中にありますが、私の体験もそういった状況にかなり影響を受けたものになりました。歴史的建造物や伝統的儀式などは殆ど、そのままの形で保存されております。と同時に、この20世紀における日本の変化に対する順応性の良さは、注目すべきものであります。しかし、そのような変化が、どれほどまでに日本の生活様式に脅威を与えているかを理解するのは、大変難解なことでございます。

私は教師として、主に学生達と共に過ごしました。日を追うごとに彼等と話す機会も増え色々なことを聞くことができました。そこで気付いたのは、彼等は今まさに変化の真只

教職員英会話講座参加者と共に

中にありますが、それは決して彼等自身が創り出したものではないということです。

また、10年後に熊本へ戻ってきたとしても、今と同じ姿のままではないだろうと聞いたことがあります。建物の新築や改築、修理等は、生活レベルの向上に役立つとしてもてはやされております。それに対して若者達は、私の予想に反して、手放しで喜んでいるのではありません。現在の生活に満足はしているものの、随分多くの学生が不安を感じているのも事実で、これには少し驚きました。厳しい学校教育に憤りを感じていて、将来的に有望な職業に就いたとしても、それが即ち生活レベルの向上には繋がらないのではないかとの恐れを抱いています。また、家族との関係で、将来を約束された仕事さえ放棄してしまうようなこともあります。大学生の軽薄さはよく語られることですが、彼らは醒めた目で人生を観ているのです。とはいえ、彼等も変化には適応していかなければなりません。

変化は伝統的な価値感を腐敗してしまうのでしょうか。このように複雑で変化の激しい世界のなかで、現代の若者達や次の世代の人々は、伝統的な価値感とより良い生活への要求とのバランスを上手くとっていくことができるでしょうか。そうできるのを願っております。

こういったジレンマに陥っているのは日本だけではないということを、文化の交流の申し子達が世界に示していくことでしょう。

〔1992年9月～1992年12月　本学滞在〕

暖かい情にあふれた熊本の一年

大田大学校副教授　宣　吉　均

一年間の熊本の生活が終わろうとしている。初め交換教員として熊本に来る時は、未知の生活に対する期待感、そして日本での生活といういくらかの不安感があったが、いまは通りの街路樹一本、道の草一株、そしてキャンパスの葉を落としやせ細ったような銀杏にさえ暖かい情を覚え、親しみを感じながら暮らしている。ひとことで言えば、熊本の町の風景ひとつひとつにも情を抱き、なつかしさでいっぱいに満たされる一年間であった。しかし、こんなにも親しくなったここでの生活ももうすぐ終わり、すべてのことが追憶のなかへと永遠に埋もれてしまうかと思うと、もうすこし何かをしたいという物足りなさや、もっとこうしておけばよかったという思いにかられる。

交換教員として熊本商大・短大で勤務しながら、熊本で過ごした一年間、私は多くの有益な経験をした。なかでも来日以前にも抽象的にしか知ることができなかった日本についてのいろいろな知識を、すこしでも具体化する契機とすることができたことである。特に大事なことは日本を理解する自分自身の考えを育てたことである。

率直に言って私の日本に対する感情は普通の韓国人と比較してそれほど悪くはなかった。そのため交換教員の申請にも何ら抵抗を感じなかった。しかし、いわゆる親日派ではない。韓国人の「日本」に対する感情はいまもかなりよくない。しかし、ここでいう「日本」と

は個人対個人の感情ではなく、日本と言う集団に対するものである。私は個人的に多くの日本人と友誼を結んで来たが、「日本」を全体としてとらえれば「日本は加害者、韓国は被害者」という観念が先に浮かんでくる、そんな韓国人の一人であった。

このような日本観を持っていた私が、熊本で多くの日本人と出会い、話をし、学内外のたくさんの人々、また旅行中にあった人たちなど、すべての日本での生活と経験を通して到達した結論は、私が日本をあまり知らなかったこと、また知ろうと努力していかなかったということだ。今までの私の中にある「日本」は壬辰の乱を起こし、韓国を36年間支配し、太平洋戦争に敗戦したが、韓国戦争を踏み台として経済復興を遂げ、世界一の経済大国になりながら、技術移転にはひどく吝嗇な国といった漠然としたものであった。小さな例だが、「相撲」についてもＴＶで見たことはあったが興味がわかず、韓国の伝統的なスポーツである「シルム」のほうがずっとおもしろく、立派なスポーツと自負していた。しかし、日本でたびたび相撲を見るうちに技の妙や、番付編成のおもしろさを知り、日本の伝統がのこるこのスポーツを日本人が好きなのも当然だと考えはじめた。私は簡単な、断片的な知識だけで、「日本とはこんな国」とひとりで結論を出していたのが事実だった。いまはそんな観念から解き放されてすこしは具体的に日本を理解できるようになってきた。

教職員韓国語講座：感謝状を手に

このように熊本の一年間の生活は私の日本観を変え、成熟させるものであった。これを土台に、微力ながら日・韓両国の理解増進の触媒的役割を果たす姿勢をつくることができたと思う。非常に意義ある生活だった。

最後に私の熊本の生活が順調にゆくようにいつも手伝って下さった国際交流センターの皆さんと大学の教職員の皆さん、それに私が知り合った多くの方々にありがとうとお礼を述べたい。今日も暖かい心で私に相対した人達の顔をひとつひとつ思い起こしてその全てを私の人生の大切な記憶として大事にしまっておきたいと思う。

〔1992年４月～1993年２月　本学滞在〕

ＪＡＬスカラーシップ奨学生のホストファミリーの感想

経済学科４年　佐藤　哲也

台湾からの留学生で僕の友人のリチャード君はＪＡＬスカラーシップのプログラムでたった１日だけ熊本を訪れた15人のうちの１人です。

会話はすべて英語で行なったのですが、同じ文化圏の一員なので、言葉の壁などは問題にならず、気持ちはすぐに通じ合いました。その夜僕等は飲んで歌って、語り明かし、彼の言う所の「日本での最高の時」を過ごしました。彼がくれる手紙の中でも卒業後は必ず

熊本で過ごしたいと言っている程です。僕にとってもすごく貴重な体験になったということは言うまでもありません。同じ英語で話すにしても、これが欧米からの留学生であれば話は違っていたでしょう。アジアの方々とつき合うには英語はそれ程問題にはなりません。まして学生であれば必ずお互いの文化の深い交流がはかれることと思います。

近くに位置していながら実際に遠くなりがちなアジアの兄弟たちと、再会されてみてはいかがでしょうか。

歓迎会での記念撮影

○

6 page　The Taejon Monitor　November 2, 1992

Feature Ⅱ of the 12th anniversary of Taejon University

Interview

We are friends. We are「Chingu」

In 1985, Taejon University set up a sistership with Kumamoto University of Commerce & Kumamoto Junior College (Japan) for exchanging scholars and learning.Two universities have adopted a system of exchanging professors for elevating linguistic ability.

The Taejon Monitor met prof. Kitahara Akihiko of Kumamoto Univ. in remembearnce of the 12th anniversary of our university. He majored in economics. He has taught Japanese in our university since last Sep. －Ed.－

Q:Would you give your first impression of Korea?

A:Actually, I have visited Korea twice before. When I first visited Korea I felt like I met one of my distant relatives. And this time, I'm really enjoying my stay here.

Q:Would you give your first impression of our university?

A:I was impressed by the fact that the faculties, the staffs, and the students are delicate, sincere, faithful and active.

Q:There have been many historical problems between Japan and Korea which have not yet solved completely. What do you think of that?

A:I think people of two countries should contact much more than now, personally. Namely, we should become friends! Even though there are some problems, we can have a heart-to-heart talk as friends. Interdependency of our economies can help to make present situation improved, as well.

Q:Even though we set up a sistership, there were not many practical academic exchanges. What do you think is necessary for accomplishing a fruitful development of our two universities by way of sistership?

A:An exchange of ideas on the practical academic exchanges is necessary. The meanings of practical academic exchanges have a wide range from personal level to social level. Both universities developed the exchange system of professors, even though it did not reach the goal which the professors of both universities expected. I think more active academic exchanges may improve the comprehension of each side.

Q:I think, there is a remarkable difference in the academic atmosphere of the two schools. How do you feel about it?

A:Each university and college has its own atmosphere. We don't have to care about others. If we find some common purposes in academic activities, the climate of the campus doesn't matter. It may be difficult to pursue an ideal purpose in any situation.

Q:Comparing the Japanese students with Korean students, what would you say?

A:Basically, they are the same I suppose. I don't know well enough to compare. Korean students seem to enjoy their university lives. After an entrance examination, most Korean students seem to spend a lot of time without studying hard. To study is hard for any country students.

Q:What do you think is the most serious problem in Korean society?

A:In any country, family life-style and ethics seem to have an aspect of conservativeness. Korean society as well as other contries have the conservative ideals for family life style or the ethics. With the development of economy, the change of social ethics and a value system will emerge as a serious problem in changing Korea.

Q:Have you ever seen Korean students rise in revolt against the government on TV or on the street? If ever, how did you feel about it?

A:I thought they were very active. I am not entitled to evaluate their activities. Especially Korean students seem to accept political issues very seriously. But demonstration activities should be viewed from the view points of their own special situation.

Q:During your stay in Korea, what difficulties did you find? And weren't there any impressive events?

A:The size of retailers may be smaller in Taejon than those of in Seoul. So I have to say something to every person in shops. Sometimes I have to communicate with them by hands. But Korean-

"The Taejon Monitor met prof. Kitahara Akihiko. His major is economics"

s are very kind, I think.

Q:Finally, as an exchange professor, do you have any message to deliver to our university students?

A:Please visit our university and college in Kumamoto in near future. We are friends! We are Chin-gu! Boys, be ambitious!

by Student Editor

韓国・大田大学校に交換教員として滞在中に「THE TAEJON MONITOR」のインタビューを受けた北原明彦先生

「THE TAEJON MONITOR」November 2，1992に「友よ、チング（友）よ」と題する記事が掲載された。インタビュー記事枠内の訳は以下のとおり。

1985年、大田大学は日本の熊本商科大学・熊本短期大学と教員や研究内容の相互交換のための姉妹校提携を行った。現在語学能力の向上を目指して、交換教員の制度が採用されている。

THE TAEJON MONTORは大田大学校の12周年記念に際し、熊本商科大学の北原明彦教授にインタビューを行った。教授の専門は経済学。昨年９月から本校で日本語の指導に当っておられる。

―― 編集局 ――

長期交換留学生報告記

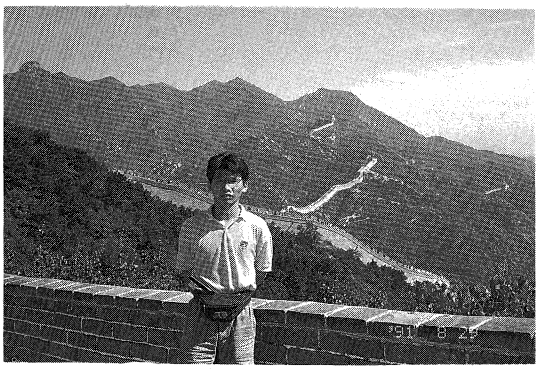
中国に一年間留学してみて

経営学科４年　村橋　秀樹

悠久の歴史をもつ未知の国、中国。これを一言で表現するとしたら“大きい”という言葉以外、浮かんできません。地球儀でみても一目瞭然ですが、実際、中国各地を汽車を使って旅してみると、その大きさが実感できます。

中国＝貧しいと連想される人がいますが、私の留学していた深圳という所は、最近中国で最も注目されている経済特区の１つであり、また香港と隣接していることもあって香港系の資本が流入し、街には近代的なビルが建ち並び全く中国と感じさせない所です。深圳大学はここから車で40分ぐらい離れており、深圳の街とはうって変わって広くてもの静かで、また亜熱帯気候区に属しているので、日本ではあまり見られない花や木などが、大学内に植えられており、きれいな所です。

香港に近いため、留学している間20回ほど香港に足を運んだのですが、行くたびいつも香港のすごさに圧倒されていました。香港も、もとはといえば中国の一部だったのですが、戦後40数年間中国国内で大躍進、文化大革命などが起こっている間に着実に発展し、今では内地と雲泥の差です。またあの内地のような雰囲気は全く残ってなく、みんな結構おしゃれで外から見た限りでは日本人とほとんど変わりません。同じ漢民族でありながら香港人がここまで変わったのは、イギリスの援助による経済発展もあると思いますが、教育にも力を入れたからではないでしょうか。



「不到長城非好漢」

今、中国は鄧小平の下で市場メカニズムの導入をはかり、「経済開放政策」を行なっています。これにより街の中に物はあふれ、人民の生活も以前より向上したように思われます。しかし、これから中国が発展していくためには、経済の改革・開放より先に教育に力を入れるべきだと私は思いました。

一年間、祖国日本を離れ異国の地で暮らすというのは、私にとって生まれて初めてでしたが、日本では絶対体験できないようなことが体験でき、またいろんな人々とつき合うことによって視野が広くなり、充実した留学生活を送れたのではないかと思っています。今後、この留学で学んだことを無駄にしないよう生かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、この様な機会を与えて下さった大学と志文会の皆様に厚く御礼申し上げます。

〔1990年２月～1991年２月　深圳大学派遣〕

語学と留学体験

国際経済学科3年　西村　美夏

私が姉妹校の深圳大学に着いて一番ショックだったのは言葉が通じないという事実でした。

もとから中国的なものに興味があった私です。大学に入って第二外国語で中国語を選択して今度は言葉の魅力に惹かれました。力試しのつもりで受けた交換留学生の試験に思いがけなく合格。留学直前の語学研修を受けながら、実際に中国に渡って自分で確かめてみたいもののあれこれに思いをめぐらせていました。

一年間真面目に勉強してきたつもりだったのに、これではやりたいことのいくらもかなえることはできない、と正直言って焦りました。日本でやってきたもののすべてが無駄だったように感じ、不安でした。大学の国際交流室から「だまされたと思って三ヶ月頑張りなさい」という不思議な励ましをもらって取り敢えずやるしかないと思い切っても、まだまだ不安は残りました。

詰め込むだけ詰め込んだ単語や文法が即座に口から出てくる。これはある種の運動神経みたいなもので、最初の三ヶ月である程度できてくるようになる、というのは留学経験者ならみんな知っていることだそうです。そして経験しなければわからないことでもあります。

11月の海南島にて

来期の交換留学生が決まりました。「だまされたと思って」と私は言って、例の三ヶ月の話をしました。三ヶ月後には行く前よりもっともっとあの国が好きになっているはずです。

こんな素敵なきっかけをくれた交換留学制度に感謝しています。これからも帰ってきた学生に、行く学生が「だまされたと思って」のリレーをしていけたらいいな、と思います。

〔1990年2月～1991年2月　深圳大学派遣〕

アメリカでマンネリを打破して

経済学科4年　清田　俊秀

いよいよアメリカでの授業がはじまるという時、授業の登録が待っていた。だが登録のやり方などよくわからないまま登録の場所へと。しかしあれほど日本で胸を膨らませていた授業が定員を越えていたためそれらの授業を取ることができず、ただその場で右往左往するばかり。周りにいる人に尋ねてもみな要領を得ない答ばかり。その時ほど主張がうまくできないもどかしさと、言いたいことをはっきり主張することの大切さを実感したことはなかった。

ところで、熊本商科大学も次々に新校舎が立ち並び、益々学ぶ環境がよくなってきている。学生としてみればこのようなハード面が

寮でフロアーメイトと

改善され学ぶ権利の充実が図られている。他方本来あるべき教師と学生のアカデミックな活気がハード面の進歩に比べてやや劣っているのではないかと感じる。つまり学生として学ぶということ、知識を増すということにもう少し貪欲であっていいのだろうと思う。そしてそのための主張であればもっと認められるべきであり、それが大学の価値を示すことになるのだろう。

このようにアメリカの大学で生活することでマンネリ化していた日本での生活を打破することができた。私にとってこの留学は大学生活のなかで最も大きな出来事であり、アメリカで考えてきた一つ一つを今後も大事にしていきたいと思います。

最後になりましたが、このような機会をいただいたことに感謝するとともに、今後熊本商科大学の国際交流が全世界に広がることを期待します。

〔1991年4月～1992年3月　モンタナ州立大学派遣〕

ボーズマンで初めて開かれた集会

経済学科4年　宮本　雅子

アメリカにいって、私はある人のポスターを買った。I HAVE A DREAMという有名な演説を始め数々の黒人開放運動を行なった人、Martin Luther King, Jr.である。今や、キング牧師はアメリカで黒人ばかりでなく、白人にも広く尊敬されている。モンタナでは黒人が少なく、MSUには主にバスケットボール選手に数人いるがその他にはあまり見かけない。アメリカの大都会のように黒人との接触はなく、白人と黒人との間の差別に対する意識もあまりなかった。そんな私がある集会で衝撃的な体験をした。

アメリカにはいろんな祝日のある中、キング牧師の記念休日もある。ボーズマンでは今までその日のために行事が行われることもなかった。ところが、私が留学した年のその日に初めてボーズマンのある教会でキング牧師を偲んで集会が行われ、アメリカ人の親友と共に出席した。約30名の人たちが集まり、運動当時のフィルムとモンタナに住んでいる3名の黒人のゲストによって具体的な話が行われた。ゲストの話は特にリアルで、実際モンタナで差別にあった事なども聞くことができた。

その集会では東洋人は私一人だったが、ぜひもっと多様な人たちが来ればよいと感じた。体験談を聞いている時、2つの気持ちが交錯

小学校訪問

し、感動して目に涙が浮かんだ。1つは、根強く残っている黒人への軽蔑に対するやりきれない気持ち。そしてもう一つは、少なからず私自身がそんな体験をしてきたという事への悲しさ。

私は嫌なことに出会う度に、なかなか英語ではっきり言えない自分に悔しい思いをした。そんな思いをたくさん噛みしめながら生活した日々は、私にとってひとつひとつ教訓となった。もちろん、私はそんなことばかりを経験したわけではなく多くのアメリカ人の友達と共に素晴らしい、楽しい日々も過ごした。しかし、一年を通して日本からは見えないアメリカの現実を垣間見た気がした。

I HAVE A DREAM　多種多様な人々が共に平和に暮らせる日々を。

〔1991年4月～1992年3月　モンタナ州立大学派遣〕

心に残る想い出

キャロル大学　アリサ・ピッツスティック

一年間の熊本滞在の後、アメリカに帰国してから7カ月が過ぎました。私は今でも、しばしば日本の中の色々な地域やそこで出会った人々についての思い出を辿っています。

熊本商科大学は想い出の中心にあります。商大では週三回小貫先生（現マスデン夫人）の下で日本語を勉強しました。先生がいなかったら私の日本滞在はこれ程印象的なものとはならなかったでしょう。日本語の知識のおかげで日本滞在が楽しいものとなり、それだけ多くのことを学ぶことが出来ました。日本語を使ってお好み焼きを注文したり、タクシーの運転手とお喋りしたり、ホームステイ先の人達と理解し合ったり……とにかく日本の人達と心を通じ合うことが出来たのです。

私は親切で親しみやすい教職員の皆様、特に国際交流センターの皆様のことを思い出します。この人達は私達が安心して留学生活が送れるようにと努力して下さいました。一番うれしかったのは皆様の友情と思いやりの気持ちでした。

商大の託麻祭では学生達の積極的な参加と、行き届いた準備と、精力的な作業に強く印象づけられました。また学生達の私への率直な関心と友情も忘れることが出来ません。時にはお互いの思いが殆ど通じないこともありましたが、茶道クラブやマンドリンクラブの学生の皆さんと過ごした時間、そして私が知り合った他の学生の全ては私の日本についての最も幸せな思い出の一部となっています。

私は熊本の町の賑わいを思い出しています。勿論熊本城は忘れることが出来ません。特に心に残るのは、そこで梅酒を頂いた事、まるでピンク色に染まった波の泡立ちが一面に広がっているように見える桜の花の下でお花見をした事、そして日本滞在最後の日に、そこに咲く有名な肥後菖蒲を見に行った事です。しかし、今日に至るまで私が日本の中で一番

たくさんの方々に支えられて熱弁をふるうアリサさん

好きな場所は熊本の武蔵塚です。（東京も京都も姫路もその比ではありません。ただ、京都と姫路は熊本に次いで好きな場所です。）この武蔵塚の美しい庭園の中には真に人生の達人であった武蔵の霊気が静かに漂っていて、春夏秋冬いつそこを訪れても平和と静寂の安らぎを覚えるのでした。

最後になりますが、本当に大切な事を言い忘れていました。それはホームスティ先の人達に大変お世話になった事です。いつもやさしく頼りになる人達でした。私はこの人達から日本や日本語について多くの事を学びました。私は熊本の人達が皆、同じように、この美しい町、熊本を訪れる外国人に心を開き、援助の手を惜しまれない事を心から願って止みません。

〔1991年9月～1992年8月　本学受入〕

熊本での体験

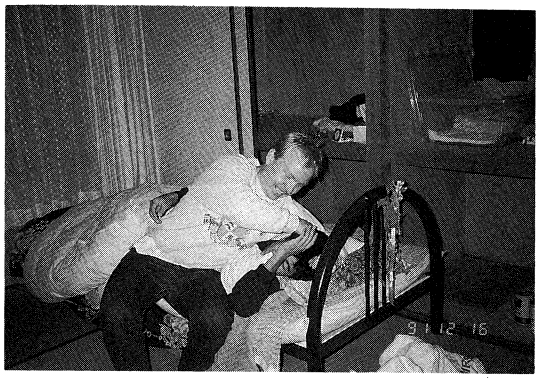
モンタナ州立大学　ティム・クルースナー

私が日本に行くためモンタナを離れた時、これから先私の身に何が起ころうとしているのか想像もできませんでした。ただ、はっきり解っていたのは、生まれてこの方経験したことのない、どのような冒険や体験が待ち受けていても、敢然とそれに立ち向かって国を出る決心がついていたことです。そして留学を終えた今、この冒険と体験が素晴しく貴重なものであったと御報告申し上げることが出来てとてもうれしく思います。

私は今熊本を『生まれ故郷を遠く離れた心の古里』と呼ぶことにしています。熊本は住むのに退屈しない町です。私は熊本に住めて幸運でした。モンタナからは遠く離れていても淋しくはありません。熊本はその中に楽しく溶け込み新しい友達を作る機会をたくさん与えてくれます。熊本でのいろいろな体験は決して忘れることはないでしょう。

商大での交換留学生として熊本に着いた時、皆様に大変お世話になり温かく接して頂きましたが、そのため熊本が好きになりました。熊本にいると安心感があってほっとするのです。思えば、飛行機から降り立った時、私は日本語が全然喋れず、今から先どうなるのか皆目分かりませんでした。その私が、すばらしい商大教職員の方々そして私のルームメイトで友人の村上大介君のお陰で大いに日本語と日本文化の知識を修得することが出来たのです。私はこの知識を今でも大切にし、興味深く勉強を続けています。また商大に籍をおいたことが熊本のJETPROGRAMという機関への就職につながり、今も日本滞在を延長して『心の古里』熊本に住んでいるのです。

熊本での体験から学んだ最も重要なことは、日米間だけではなく、すべての国々の間の国際化が如何に大切なものであるかということでした。私達のだれもが知っているように、未来は私達若者のものです。若者が未来にそ



インターナショナルルームメイトの村上君と

なえてお互いを知り合おうとしないならば、未来は今より決して良くはならないでしょう。今、この時点で、私達若者に必要なことは、世界中のすべての人達に向けて私達の心を今よりも更に大きく開くように努めることではないでしょうか。世界は狭くなりつつあります。私達は文明の新しい時代にさしかかっているのです。私達はある意味で国境のない世界に住んでいます。私達はこの国際化の波を止めてはなりません。

この点で、私は商大の皆様が国際化に貢献されている姿に敬意を表します。そして商大が将来、幸運と繁栄に恵まれるよう祈ります。どうかこの国際化のためのよき事業をお続けになって下さい。私も皆様と同じように、少しでも国際化のお役に立ちたいと思っています。

〔1991年9月～1992年8月　本学受入〕

留学で得たもの

経済学科4年　外野木佐代子

私は昨年モンタナ州キャロル大学へ留学した。モンタナは田舎であり時には退屈であったが、美しい自然の中で人生の休暇をとりながら勉強させてもらった。

1年間の留学で英語がモノにできたわけではないが、再び日本で英語を勉強し始めてみると、経験と実生活、興味により進歩も倍早くなっている。また地方都市熊本でさえ世界中から人が集まっており、英語圏から来た人と話す事は簡単なのでモンタナで覚えた英語に磨きをかけることも可能である。

しかし、当然の事だが留学して学んだ事の内、英語の上達というのはほんの一部の事にすぎない。自分の見た事、感じた事、話した事全てが刺激であり、その日、その時を大切にするようになった。育った環境の違う人、全く違う文化の中に育った人と話合うことにより多様な考え方をするようになった。

自分への影響として顕著であるのは、国際的民族的違いという解決しがたい問題にぶちあたったり、より広い世界を見た事で、帰国してから身の周りに起こる事件、いざこざが小さく見え、留学の前ほど気にならなくなっている。少なくとも日本語が通じるのだから誰とでも話せるし理解し合えるようになった。

また日本へ帰って日本の良さ、住み易さを実感し、日本人を経済や歴史の上からだけでなく人間性という点からも誇りに思うようになった。当然アメリカの素晴らしさ、日本のまだ遅れた部分を知った上でである。英語を学ぶ事により私の人生のチャンス、楽しみ、経験は2倍になった。

しかし、日本人が米国へ行くと、無関心、時には見下しにも遭うから、日本へ来た白人、西洋人に対する日本人のかぶれや過剰サービスは矛盾している。世界中の国、民族にもっとも目を向けると共に、自分自身を、自分の国を、そしてアジアをもっと大切にするよう

ハロウィーンの準備

にしたい。

私が留学のきっぷを手にできたのは商大のおかげだが、元は小さい頃からの英語のロックや洋画へのあこがれが勉強につながり実際に留学して、西洋文明のうら側、アジア民族の立場、そして世界事情全般について学べたのは幸運であった。とにかく夢やあこがれが基本であり、それを持ちつづければチャンスは必ずふってくるものだと思う。

〔1991年9月～1992年8月　キャロル大学派遣〕

心に刻まれているサンアントニオ

国際経済学科3年　橋本　美穂

全米で人口が第9番目の都市サンアントニオ。中心地には美しい「リヴァーウォーク」、そして周りの景色にそぐわない「アラモの砦」。少し車を走らせると、カウボーイが集まる田舎風のバーもあるし、新しさと古さがなんとも微妙に混じり合っている変わった町である。

夏真っ盛りの時に、最南州テキサスにあるこの町に到着したものだから、その暑さといったらなかった。それに引き換え、人々のカラッと爽やかな笑顔。メキシコ文化が人々や町を、陽気なオレンジ色に染めているようであった。

グァテマラでの研修

私はこの町をずっと愛し続けるであろう。人種が混じり合っているこの町の雰囲気が好きだという理由だけでなく、語り尽くせないほど素晴しい人々に出会えた町だからである。年齢、職業を問わず友人になった人達から、毎日何かを吸収し、自己を発見していくことが、たまらなくおもしろかった。宗教、社会の矛盾、そして経済や政治に至るまで、意見をぶつけ合うのは本当に楽しかった。

勿論、授業や遊びも“真面目”にやった。授業は、留学中に11科目取り、その中の9科目は「優」で通した。週末は、宿題に追われながらも、パーティー、映画、スポーツと暇を見つけては友達とワイワイやった。夏休みは中南米4ヶ国を訪れる特別クラスを取った。今思うと、本当に精力的な一年間だった。後込みしがちな私の背中を押してくれ、勇気づけてくれた友人達がいなかったら、そういったパワーは絶対に生まれなかったと思う。

人々との出会いから何かを吸収し、失敗を糧として、その全てを自信に変えていくこと。それが留学を通して学んだ一番大切なことで、サンアントニオの強い日差しとともに、一生、心に刻みこまれていると思う。

最後になりましたが、この機会を私に与えてくださった方々と、留学中にお世話になった方々に、心から感謝の意を表したいと思います。ありがとうございます。

〔1991年9月～1992年8月　インカーネットワード大学派遣〕

日本の旅

深圳大学　応　鳴　一

一年の半分ぐらいは真夏のような暑い深圳から来た私は、日本の気候が大好きです。春夏秋冬、四季の移り変わりがはっきりしていて、風景も季節によって変わっていきます。昨年三月下旬に来た時、学校の銀杏は少し緑の芽が出た、まだ肌寒い初春でした。ピンクの雲のように満開のさくらを見る暖かい四月の春、日本という国のイメージが強く感じられました。夏はつつじが美しく、モクセイの花が咲く頃には、もう秋がおとずれました。この頃、学校の銀杏の葉はほとんどが散り、寂しく冬のメッセージを伝えているようです。日本の四季を初めて経験した私は、この国をよく理解できるようになりました。

中国にいた時、日本に対しての印象はほとんど映画、歴史小説からしか得られなかったのです。時には、テレビで日本についてのニュースが少しあるけれども、物足りない感じばかりでした。しかし、「あっ、日本の経済は大成功を収めているんだなあ」とよく感じていました。日本の人々の一生懸命な仕事ぶりや、日本人のユニークな国民性はほとんど見当がつきませんでした。

夏休み広島にて

日本に来て、実社会の中でいろいろな人々と出会って、一緒に勉強したり、遊んだり、話し合ったりして、日本人の心のやさしさが感じられるようになりました。と言うのも熊本市の道はとても複雑だと思いますが、迷った時に助けてくれた方が多いんです。その時、日本語のあまりよく理解できない私に何回も何回も繰り返して親切に教えてくれた方もおられました。ですから、いつも楽しい旅を楽しんでいます。ホームスティに行った時、日本人のお父さん、お母さんが美味しい料理を作ってくれたり、細かい世話をしてくれたりして本当に有難いのです。大学の国際交流センターの皆さんにもお世話になったことが数え切れないほどあります。そのお蔭で、熊本では充実した留学生活を楽しく送ることができました。

せっかく勉強のため日本に来たのですから、学問の精進も怠ってはいけないでしょう。もちろん日本人の学生と一緒に日本語で行われる授業に出ているのですが、初めの頃はなかなかついていけないとの感じばかりでした。日本語を使う日々が経つにつれて、そして周りの一人一人の日本語の「先生」のお蔭で、授業中先生の言葉がうまく分かるようになったばかりかノートも日本語で書くようになりました。時々中国語での表現方法を忘れてしまったということも少なくありません。日本語がうまくなって、卒論の資料収集にも役立ちます。今から、来年の大学の卒業式を楽しみにしています。

さようなら。いい思い出を思い出される国―日本。

〔1992年3月～1993年3月　本学受入〕

日本での思い出

深圳大学　範　漫　真

月日の経つのは速いものです。またたく間にあわただしい年の暮れを迎え、また私の留学生生活もそろそろおわります。この十ヶ月の留学生活は、私にとって初めての異国生活ともいえます。いま振りかえってみると、楽しい思い出が数々あります。まず筆頭にあげられるのは、私達に快適な生活を提供し、またいろんな面倒を見てくださった本学園の国際交流センターの先生方に一言“ありがとうございました”といいたいのです。

これまでの日本での生活で一番印象深いのは、各家庭でのホームスティの体験です。ホームスティを通して日本の生活、風俗、文化をはっきりと実感させられます。古田先生の教養ゆたかな奥様とお会いして、いけ花や日本料理などの知識を身につけることができたうえに、日本の若い学者達が厳しく学問に専念していることも感じられます。また西村先生のお姉さんの家で苺狩りをしたこともあります。そして先生の家でおじいさん達の造られたいろんな野菜を味わうことができ、農業に無知な私にとっては、大変視野を広げる事ができました。また一方で日本のサラリーマンはストレスを解消するためにうるさいパチンコ屋へ行くよりも、すこしゆとりを持って農作物を育てたり、あるいは日本独特の風物のなかで自己の世界で暮らしてゆくのもよいのではないかと思いました。

私は本学園の先生方に大変感心させられます。というのは先生方が深く豊かな専門知識を持っていらっしゃるとともに時代に遅れないようにいろいろな工夫をなさっているからです。自国の政治経済に大変関心を持っていらっしゃると同時に、他国の政治経済あるいは国際関係にも注目されています。これに対してある商大の学生は相撲選手貴花田の婚約相手が宮沢りえちゃんだったことを知っているのに、自民党の総裁が宮沢喜一氏なのを知りません。学生の政治への無関心に私は悲しさを感じています。

またこの一年間人生についてもいろいろ考えてきました。依然としていまの中国では大学へ進学するものは若者の３％しか占めていません。一般には高校を卒業してから、国家の政府機構や銀行や貿易会社などの事務室に勤めています。これを常識として受け取っていた私は先日あるタクシーの運転手が商大の卒業生だということに驚きました。たぶん卒業には尊卑の差別がないかもしれません。（けれども大学の講師になるのは、今も私の最高の夢です。）

大学受験のために“四当五落”といわれるように一生懸命勉強し、またサラリーマンになったら仕事に明け暮れなければいけない大学生が、この四年間に遊びたい気持ちはわか

熊本の友人と

ります。けれどもこの“ほっと一息”はちょっと長すぎではないでしょうか。私は心配しています。若いうちにたくさんの知識を身につけておいたほうが将来の人生にとっては大きく役立つにちがいないのです。またこの現状を変えるために大学の先生方からのご協力も必要だと思います。つまりすこし厳しくなると学校の名誉と学生の成長のためにきっとマイナスではないはずです。

最後に熊本商科大学・短大のこれからのますますのご発展を心からお祈りします。

〔1992年3月～1993年3月　本学受入〕

熊本の想い出

リヨン商科大学　セヴリーヌ・ロワイエ

一年前リヨン商科大学の先生に「あなたは今年熊本の商科大学に一年間留学できる」と言われた時私は少し不安でした。生まれた時からずっと大きな都市に住んでいたので日本でも東京のような大都市に行きたいと思っていたのです。しかし10か月後の今では熊本にいることをとても喜んでいます。外国で生活することは場合によっては大変です。例えば、生活様式や考え方や方言がよく分からないので戸惑うことが多いのです。しかし私は熊本での留学生活を楽しく過ごしています。一般的に熊本の人々は親切でお店の人も笑顔で対応してくれます。また私にフランスの事をよく聞きたがります。熊本はきれいでみどりが多く、昔からの和風作りの家と現代風の建物が両方あるので外国人から見て、おもしろいと思います。

そして、商大では、授業がおもしろく楽しく勉強できました。フランスで私は経営学を勉強しています。だからこの一年間の留学の第一の目的は日本的な経営の方法をよく知り、フランスのやり方と比べることでした。その点で、私の受けた授業の内容は興味深いものでした。もちろん授業を受けながら日本語の勉強もできました。これらの理由から私は留学の目的を十分果たすことができたと思います。

この一年間日本人と住んだり、日本人学生の友達と一緒にいたりした機会が多く、私は留学前より日本の伝統と社会が分かるようになりました。そして同時に、私は私の国のことも日本人に教えられる機会を持つことができました。例えば最近はヨーロッパの統合について記事がよく出ています。日本人はヨーロッパは遠い国のことと思っていますが私はヨーロッパ人と同じように日本人もこのことを知る必要があると思いました。

とにかくこの留学生活はとてもおもしろい経験でした。これも教職員の方々、大学生、友達、みなさまのおかげです。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

〔1992年4月～1993年3月　本学受入〕

「仏人留学生が見た日本」を語る筆者

本学の留学生への外部からの主な案内（1992年度）

名　称	主　催	内　容	期　日	備　考
留学生の会	熊本ＹＷＣＡ	日本の家庭紹介 各種行事への案内	年間を通じ随時 入会申込受付	
熊本・大分県内 留学生交流会	国際ロータリ第2720地区 ローターアクト	阿蘇での交流会	6／21	21名参加
「レッツ　カーニバル In　天草」	天草本渡青年会議所	ホームステイ	7／24～26	16名参加
水俣国際親善競り舟大会	水俣市	大会出場・ ホームステイ	8／1～3	3名参加
『能』（金春流）	くまもと クラフトセミナー	お話と体験交流	9／19	3名参加
国際交流に関する 懸賞論文	西日本銀行国際財団	テーマ 『アジアを考える』	夏期休業中	『優秀賞』 を受賞
日本語弁論大会	㈶福岡ＹＭＣＡ	テーマ 『私から見た日本人』	9／26	『特別賞』 を受賞
「ラジオだバンバン 火曜日」	ＲＫＫ熊本放送	ラジオ出演・故郷の 紹介	10／6,13,20,27	豪・韓・中・仏 ・英
国際文通週間	熊本東郵便局	友の会会員との交流	10／11	1名参加
アジア文化交流の広場へ 参加	荒尾市	荒尾市政50周年記念 行事	10／25	3名参加
中国要人来熊歓迎 レセプション	熊本県国際課	中日国交回復20周年 記念行事	11／20	8名参加
チャリティ 餅つきバザー参加	熊本南ライオンズクラブ	在熊留学生奨学基金 の一環	12／6	アメリカ・イギ リス・中国
「国際交流クラブ」訪問	大江小学校	児童との交流	12／18	アメリカ・イギ リス・中国
熊本市消防出初式	熊本市消防局	見学参加	1／16	4名参加
国際教育理解のための 講演	武蔵中学校	生徒向け討論会形式 の講演	1／26	中国・韓国・英 国
校内研究会での講演	西山中学校	教員を対象とした 国際理解	1／18・2／10	中国・フランス
春節祝賀会	熊本県日中交流協会	懇談と夕食会	1／27	25名参加
激励懇談会	熊本南ロータリークラブ	懇談と夕食会	2／26	

1992年度　地域別外国人留学生数

（９月１日現在）

国籍	学部・学科留学生							研究留学生			院生	合計
	商大				短大		合計					
	1年	2年	3年	4年	1年	2年		商大	短大	合計		
中国	9	11	5	4	1		30名	17	11	28名	4名	62名
韓国	2		3		2	2	9名	7	2	9名		18名
台湾	2	6	2	1	1		12名	1	1	2名	3名	17名
オーストラリア	1						1名			名		1名
インド							名	1		1名		1名
米国				4			4名	1		1名		5名
フランス				1			1名			名		1名
イギリス				2			2名			名		2名
合計	14	17	10	12	4	2	59名	27	14	41名	7名	107名

1992年度　外国人留学生の奨学金受給状況

(1)　私費外国人留学生学習奨励費（日本国際教育協会）

・月額　　大学院生……６万７千円

　　学部学科……４万６千円

・受給者数　　院生……１名

　　学部……11名

　　短大……２名　　計14名

(2)　熊本県外国人留学生奨学金

・月額　　３万円

・受給者数　　院生……３名

　　学部……９名

　　短大……１名　　計13名

(3)　ロータリー寿崎奨学金

・月額　　3万円

・受給者数　　院生……2名　　学部研究生……1名

学部……8名　　学科研究生……1名

短大……1名　　計13名

(4)　在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金

・月額　　1万5千円

・受給者数　　学部……6名　　計6名

(5)　ロータリー米山記念奨学金

・月額　　大学院生……15万円

学部学科……12万円

・受給者数　　院生……1名

学部……4名　　計5名

(6)　肥後銀行国際交流奨学金（1992年度設立）

・月額　　3万円

・受給者数　　学部……1名　　計1名

(7)　横山国際奨学財団

・月額　　12万円

・受給者数　　学部……1名　　計1名

	在籍者数	受給者数	非受給者数
学部留学生	44	39（40件）	5
学科留学生	6	3（ 4件）	3
学部研究生	27	1	26
学科研究生	14	1	13
大学院生	7	7	0
合　　計	98	51（53件）	47

1992年度　留学生名簿

（1992年9月22日現在）

学部留学生・学科留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	林木鳳	女	中国	商学科1年
2	権奇雲	男	韓国	経営学科1年
3	廖柏明	男	中国	経営学科1年
4	楊思睿	男	中国	経営学科1年
5	梁湖南	女	韓国	経営学科1年
6	王建平	男	中国	経済学科1年
7	廖誌武	男	台湾	経済学科1年
8	沈默	男	中国	経済学科1年
9	スーザン　アレン	女	オーストラリア	国際経済学科1年
10	陳瑞君	女	台湾	国際経済学科1年
11	林瀚	男	中国	国際経済学科1年
12	陸兵	男	中国	国際経済学科1年
13	何成雨	男	中国	国際経済学科1年
14	刘毅	男	中国	国際経済学科1年
15	柳貞姫	女	韓国	社会科1年
16	徐到希	女	韓国	保育科1年
17	林佩文	女	台湾	保育科1年
18	孫愛紅	女	中国	教養科1年
19	韓景光	男	中国	商学科2年
20	慕強	男	中国	商学科2年
21	李勤	男	中国	商学科2年
22	劉梅	女	中国	商学科2年
23	呂跃進	男	中国	商学科2年
24	姚鰈	男	中国	商学科2年
25	楊兆利	男	中国	経営学科2年
26	呉志仁	男	台湾	経営学科2年
27	李剛剛	男	中国	経営学科2年
28	陳惠敏	女	台湾	経営学科2年
29	曲家岩	男	中国	経済学科2年
30	陳宏孟	男	台湾	経済学科2年
31	李尚家	男	台湾	経済学科2年
32	李芳琪	女	台湾	国際経済学科2年
33	袁秀雲	女	中国	国際経済学科2年
34	陳秋娟	女	台湾	国際経済学科2年
35	李谷偉	男	中国	国際経済学科2年
36	全相順	女	韓国	保育科2年
37	李東蘭	女	韓国	教養科2年
38	楊津京	男	中国	商学科3年
39	喬軍鋒	男	中国	商学科3年
40	白学澤	男	中国	商学科3年
41	韓相倫	男	韓国	経営学科3年
42	崔相哲	男	韓国	経営学科3年
43	林遠玲	女	台湾	経営学科3年
44	金仁萬	男	韓国	経営学科3年
45	周淵龍	男	台湾	経営学科3年
46	李德華	男	中国	経営学科3年
47	朱毓雷	男	中国	経済学科3年
48	孫永紅	女	中国	商学科4年
49	黄啟光	男	台湾	経営学科4年
50	劉沖	男	中国	経営学科4年
51	孫躍東	男	中国	経営学科4年

学部研究留学生（商大）

1	李　海　波	男	中国	商学科
2	黄　仁　甲	男	韓国	商学科
3	姜　泰　鉉	男	韓国	商学科
4	李　泳　根	男	韓国	商学科
5	呉　栄　錫	男	韓国	商学科
6	馬　暁　軍	男	中国	商学科
7	王　　文	男	中国	商学科
8	孫　琮　河	男	韓国	商学科
9	王　跃　华	女	中国	商学科
10	于　杰　春	女	中国	商学科
11	苗　鉄　鋒	男	中国	商学科
12	徐　麗　君	女	中国	経営学科
13	楊　奇　原	男	台湾	経営学科
14	李　谷　野	男	中国	経営学科
15	坂本八千代ニーナ	女	ｱﾒﾘｶ	経営学科
16	陳　　正	男	中国	経営学科
17	孫　文　亮	男	中国	経営学科
18	ﾏﾙｺﾑ　F.ﾒﾍﾀ	男	ｲﾝﾄﾞ	経営学科
19	羅　智　偉	男	中国	経済学科
20	杜　慕　府	男	中国	経済学科
21	黄　偉　洪	男	中国	国際経済学科
22	姜　　凡	男	中国	国際経済学科
23	朱　海　波	男	中国	国際経済学科
24	侯　朝　華	男	中国	国際経済学科
25	李　滿　鎬	男	韓国	国際経済学科
26	高　鍾　哲	男	韓国	国際経済学科
27	徐　海　洋	女	中国	国際経済学科

学科研究留学生（短大）

1	武　　平	男	中国	社会科
2	王　邕　江	男	中国	社会科
3	楊　玉　琴	女	中国	社会科
4	金　廷　恩	女	韓国	社会科
5	楊　書　敏	女	中国	社会科
6	劉　　萍	女	中国	保育科
7	李　志　芳	女	中国	保育科
8	馮　　立	男	中国	教養科
9	袁　　勇	男	中国	教養科
10	彭　海　奇	女	中国	教養科
11	朴　倞　慧	女	韓国	教養科
12	劉　惠　瑛	女	台湾	教養科
13	李　柏　桐	男	中国	教養科

大学院生

1	王　永　芳	男	台湾	修士課程１年
2	蘇　愛　民	男	中国	修士課程１年
3	陳　金　泉	男	台湾	修士課程１年
4	廖　東　鳴	男	中国	修士課程１年
5	張　　英	女	中国	修士課程１年
6	周　佩　文	女	台湾	修士課程２年
7	湯　小　寧	男	中国	修士課程２年

交換留学生

1	範　漫　真	女	中国	経営学科
2	応　鳴　一	女	中国	経営学科
3	ｾｳﾞﾘｰﾇ　ﾛﾜｲｴ	女	ﾌﾗﾝｽ	商学科
4	ﾀﾞﾆｴﾙ　ﾎﾞｽﾅﾝｽｷｰ	男	ｲｷﾞﾘｽ	経営学科３年
5	ﾃｨﾑ　ｸﾗｰｸ	男	ｲｷﾞﾘｽ	経営科学３年
6	ﾃﾞｨﾋﾞｯﾄﾞ　R.ｸﾞﾗﾝﾄ	男	ｱﾒﾘｶ	国際経済学科３年
7	ｺｰﾘｰ　ﾛﾐﾝｼﾞｬｰ	男	ｱﾒﾘｶ	国際経済学科３年

サンアントニオ市派遣留学生

1	ﾌﾞﾙｯｸ　A.ﾏｾﾗ	女	ｱﾒﾘｶ	国際経済学科
2	ﾋﾟｰﾀｰ　ﾏｽﾞｰｶⅢ	男	ｱﾒﾘｶ	国際経済学科

１９９２年　国　際

月	モンタナ	大田
１月	10日　慶田　收先生（交換教授）出発 26日　クリス・リーネッシュくん（長期交換留学生）帰国	18日　大田大学校教職員研修団来学
２月	６日　春期短期派遣留学生（５名）出発	６日　大田大学校学生研修団来学 25日　鄭鳳輝先生（交換教授）帰国 28日　勝部伸夫先生（交換教授）帰国
３月	17日　清田俊秀くん（長期交換留学生）帰国 27日　宮本雅子さん（長期交換留学生）帰国 30日　春期短期派遣留学生（５名）帰国	31日　宣吉均先生（交換教授）来熊
４月		
５月	13日　民間テレビ局ＫＴＶＱ取材 16日　ＭＳＵクリフ・モンテイン先生来熊 23日　ＭＳＵグレッグ・オルソン先生来熊 28日　ＵＭ代表団（学長はじめ４名）来熊 キャロル大学クィン学長ご夫妻来熊 ＭＳＵマイケル・マローン学長来熊 31日　ＭＳＵマイケル・マローン学長帰国	26日　金寛洙先生来熊 27日　学生國樂團来熊 28日　呉熙弼総長はじめ５名来熊 29日　呉應準理事長はじめ３名来熊 31日　学生國樂團帰国
６月	１日　キャロル大学クィン学長ご夫妻帰国 ＵＭ代表団帰国 ２日　ＭＳＵグレッグ・オルソン先生帰国 ３日　アリサ・ピッツスティックさん（長期交換留学生）帰国 ６日　外野木佐代子さん（長期交換留学生）帰国	１日　大田大学校代表団(総長はじめ9名)帰国
７月	３日　ＭＳＵクリフ・モンテイン先生帰国 11日　ティム・クルースナーくん（長期交換留学生）帰国 13日　マット・ハーディくん（長期交換留学生）帰国 19日　西澤和晃くん（長期交換留学生）出発 29日　矢澤恵子さん、成松明子さん(長期交換留学生)出発 第５回モンタナ研修団出発	
８月	２日　中村洋子さん、石黒武人くん(長期交換留学生)出発 ６日　ハロルド・シュロッツハウアー先生（交換教授）帰国 22日　慶田　收先生（交換教授）帰国 24日　原口行雄先生（交換教授）出発 第５回モンタナ研修団帰国	26日　北原明彦先生（交換教授）出発

交　流　EVENTS

深　圳	欧　州　・　そ　の　他
18日　朱海波くん、徐麗君さん（長期交換留学生）帰国 24日　村橋秀樹くん（長期交換留学生）帰国 28日　緒方浩一くん、倉重圭介くん（長期交換留学生）出発	17日　欧州視察団出発 28日　欧州視察団帰国
8日　西村美夏さん（長期交換留学生）帰国 12日　侯梅芳先生（交換教授）帰国 20日　範漫真さん、応鳴一さん（長期交換留学生）来熊	
	21日　甲南イリノイ学生研修団来熊 24日　甲南イリノイ学生研修団離熊
25日　深圳大学特区経済研究所副所長はじめ４名来熊 27日　代表団（魏佑海学長はじめ４名）来熊 31日　代表団（魏佑海学長はじめ４名）離熊 深圳大学特区経済研究所副所長はじめ４名離熊	9日　セヴリーヌ・ロワイエさん（リヨン商科大学長期交換留学生）来熊 24日　ニュージーランド・ワイカト大学代表来学 25日　仏国リヨン商科大学　米山悦夫教授来学 29日　韓国青蘭女子中・高校　校長はじめ４名来熊 30日　創立50周年記念式典 31日　青蘭女子中・高校長はじめ４名離熊
	13日　ルイス・マシュースくん（サンアントニオ市派遣留学生）帰国 20日　国際経済学科「外国事情研修」米国班出発
	1日　国際経済学科「外国事情研修」中国班出発 ＪＡＬスカラシップ留学生（15名）来学 17日　前川佳子さん、清島聖也くん（熊本市派遣留学生）出発 19日　国際経済学科「外国事情研修」米国班帰国 26日　橋本美穂さん（熊本市派遣留学生）帰国 31日　国際経済学科「外国事情研修」中国班帰国

月	モンタナ	大田
9月	1日　ディビッド　R．グラントくん（長期交換留学生）来熊 7日　ロバート　H．フィギンズ先生（交換教授）来熊 22日　コーリー・ロミンジャーくん（長期交換留学生）来熊	2日　大田大学校訪問学生研修団出発 8日　大田大学校訪問学生研修団帰国
10月	2日　UMジョージ・デニソン学長来学	
11月	16日　キャロル大学シャーリー・ベーカー先生来学	
12月	8日　UMリチャード・デイリー先生来学	27日　呉熙弼総長来熊 29日　呉熙弼総長帰国

海外留学者一覧（過去3年間）

年	長期留学		短期留学		出張・視察	
1990年	花谷　薫	アメリカ	永井　博	ニュージーランド	角松　正雄	ヨーロッパ
	石橋　洋	アメリカ			高瀬　彰典	イギリス
	広田　勇	インド				
1991年	坂口　潮	イギリス	朴　宗根	ソウル	前田　一郎	アメリカ
					渡辺　晧	西ヨーロッパ
1992年			西園寺明治	イギリス	小島　恒久	ヨーロッパ
					野見山俊一	ヨーロッパ
					井上　勝子	ヨーロッパ

海外ゼミ研修一覧

年	引率教員名	研修先	期間	参加学生
1992年	宮崎　俊策	韓国	2／22～ 2／24	24名
	田島　司郎	深圳大学	3／ 4～ 3／ 7	6名
	中野　裕治	深圳大学	3／ 4～ 3／ 7	5名
	西　紀昭	深圳・桂林・柳州	3／ 9～ 3／15	12名
	米岡ジュリ	韓国	3／15～ 3／19	11名
	用稲　孝道	釜山・慶州	3／28～ 3／31	19名
	田中　利彦	韓国・釜山・慶州・蔚山	11／24～11／26	15名
	李　公　綽	北京	12／26～12／30	12名
	西　紀昭	北京・ハルピン	12／27～ 1／ 1	12名

深　　圳	欧　州　・　そ　の　他
17日　嶌　啓先生（交換教授）出発	7日　ダニエル・ポズナンスキーくん、ティム・クラークくん（リバプール・ジョン・モーズ大学長期交換留学生）来熊 9日　ピーターマズーカⅢくん、ブルック　A．マゼラさん（サンアントニオ市派遣留学生）来熊
	5日　米国　南加熊本県人会　来学
	4日　中国河南省鄭州外事弁公室副主任はじめ4名来学 28日　学校法人熊本学園松村武雄理事長学園葬

SEMINARS

国際交流センター事務室主催：交換教授による教職員向け語学教室

1．韓国語会話クラス

講　師　　宣　吉　均　先生（韓国・大田大学校）

開催日　　1992年4月15日から1993年3月20日まで原則として毎週水曜日

時　間　　17：00～18：00

2．英語会話クラス（1）

講　師　　メアリー・ケリーさん（ハロルド先生の奥様）

開催日　　1992年4月20日から1992年7月13日まで原則として毎週月曜日

時　間　　17：30～18：30

3．英語会話クラス（2）

講　師　　ロバート　H．フィギンズ先生（米国・モンタナ州立大学）

開催日　　1992年10月6日から1992年12月8日まで原則として毎週火曜日

時　間　　17：30～18：30

※　他にも研究所や学部等が主催する講演会が多数あり、記載は省略する。

国際交流センター事務室のスタッフ紹介（1993年1月現在）

室　　長　　星子　三郎

室長補佐　　西村　禮二

喜佐田知子　　切通しのぶ　　浅生　紀子　　千馬有美子

国際交流委員会メンバー

◎古田龍助・勝部伸夫・貞松　茂・田中冨志雄
カーク・マスデン・足立昭七郎・堀　正広
今井義量・大野哲夫・星子三郎・西村禮二
喜佐田知子　　（◎は委員長）

〒862　熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
ＴＥＬ(096)364－5161